
ヒーリング最高

猫美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒール最高

【Nコード】

N0815Z

【作者名】

猫美

【あらすじ】

おかしい。会社帰りの電車の中だったはずなのに。気がついてみれば赤ん坊。

ああ・・・転生モノってヤツですか。

ストーンと納得してしまう。そこから始まる第二の人生。魔法のあるファンタジーな世界じゃないですか。

ふっふっふ。となれば、当然ヒールですよ。ヒール。

攻撃魔法？興味ないですな。はっはっは。

／表現が苦しかったとしても一人称の視点を切り替えながら展開し

ていきたいと思っています。頭の中身を書き出すのに慣れていない
為、どうか気長におつきあいいただければと思います。
／感想ありがとうございます。一部、補足と言いつきをしましたので、
よろしければ、活動報告をご覧ください。

[http://syosetu.com/userblogman
age/view/blogkey/331463/](http://syosetu.com/userblogman
age/view/blogkey/331463/)

ギャン泣きした日

記憶がはつきりとしなのだが、あまりの息苦しさで頭痛に思わず泣いた。

大声を出して泣いた。

ギャン泣きつて奴だ。

我ながら、恥ずかしいのだが・・・どうにも苦しかったのだ。頭痛も、締め付けられるような頭痛で泣いた。

いやいや。

ほんと、もうスゴイんだって。

思わず大の大人がギャン泣きするレベル。

大声を出して泣いたので、ちょっとすつきりした。

周囲を見回すが・・・どうにもうまく見回せない。

自分の状況が理解出来ない。

茶髪の看護婦さんが覗き込んで来る。

看護婦さんが何かを喋っているのだが、理解が出来ない。

「なんですか？」

と聞いたつもりなのだが、きちんと喋れたのか怪しい。

耳の調子が何やら変だ。

自分の状況が理解出来ない。

理解出来ないのだが、猛烈に眠い。

フェードアウト。

状況を整理しよう。

どうやら、赤ん坊らしい。

あまりの事に、頭の中が真っ白になったが、事実は事実として受け止めた。

夢なのかと何度も疑ったが、日常が連続しているので、事実のようだ。

ああ、転生モノって奴かと、変な理解をした。

見た感じ、SFモノって訳では無さそうだ。

どちらかというと、ファンタジー系。

魔法の有無は未確認。

相変わらず、周囲の人が何を喋っているのかは解らないが、隣に横たわっている可愛い人が母親のようだ。

ちよっと嬉し恥ずかし。

見つめられると照れる。

茶髪なんだけど、日の光が当たるとキラキラと輝いて、実に綺麗だ。

前世(?)の最後の記憶は、仕事帰りの電車の中だ。

珍しく席が空いていたので座ったら、沈み込む座席のあまりの気持ちよさに眠ってしまった。

そこから先の記憶が無い。

事故にでもあつて死んでしまったのか、脳卒中でも起こしたか。

まあ、考えた所で、寝ている最中に起こったことだ。

意識不明で集中治療室に運び込まれ、身体からは各種ケーブルが延びている状態なのかも知れないが、解らないモノは解らない。

心配してもどうにもならない。

ならば・・・取り敢えず寝よう。

考え事していると・・・とかく眠い。

フェードアウト。

あれから数日経った。

相変わらず、何を言っているのか解らない。

解らないが、母親は可愛い。

父親は・・・ちよつと厳ついが、自分を見てデレデレに蕩けていた。どうやら、良い両親の下に生を受けたようだ。

さて・・・日がな一日、暇で仕方がない。

会話も出来ないし、そもそも、動くこともままならない。

母親とお医者さん、看護婦さんの会話をじくじくと聞いているくらいか、自分の今後の展望について考えるくらいだ。

まあ、展望を考えるとと言っても、どういふ世界なのが解らないので何とも言えない。

社会人になって、学業から解放されて久しいのだが、また、1からやり直しかと思うとげんなりする。

あの時、こうしていれば・・・という後悔に対し、やり直すチャンスを得たのだ。と考えれば、案外悪くない。

そついう考え方が出来るのも、前世の記憶があるからな訳だが・・・

ふと、心配になるのが、この前世の記憶って奴はいつまで残っているか？と言うことだ。

無くなっても困ることはないんだろうが、あると便利に違いない。

消えないといいなあ。

それにしても、会話が出来ないというのはもどかしい。

赤ん坊という奴は、どうやら身体の部位をつまぐコントロール出来ないから喋れないようだ。

実にもどかしい。

喋ろうと思うと、「うー」とか「あー」になっってしまう。

とか考え事していると眠気が襲ってくる。

まあ、逆らう理由もないので寝るとしよう。

フエードアウト。

ギャン泣きした日(後書き)

T w i t t e r @ n e k o m i h o n p o

修正箇所

両親の元 両親の下(指摘感謝)

発声記念日

2歳になった。

日々、訓練を重ねたお陰で、喋れるようになった。

初めて「とうさま、かあさま」と喋った時、すごい喜びようで、もみくちやにされた。

まだまだ舌つ足らずではあるが、意思の疎通が出来るというのはスバラシイ。

まだまだ単語が解らないが、地道に憶えていくしかないだろう。

ありがたいことに文法は日本語に近い。

文字は、まだ解らないが・・・中国語みたいだと大変だなあ。

くらいに楽観視している。

自分の名前は、ウイル・ランカスター。

ランカスター家の長男だ。

母親は、リリーレルマ・ランカスター。

可愛い系のおっとり美人。

授乳の時、気まずかったのだが、コチラが一方向的に気まずいだけだ。

父親は、ウインザー・ランカスター。

見た目は厳ついが、母親や私に対してデレデレに蕩けるあたりのギヤップが酷い。

公務員という表現が正しいのかは解らないが・・・公務員のようだ。お陰で、良い暮らしをさせて貰っている。

・・・他と比較したことがないので解らないが、少なくとも、お手伝いさんの居る家庭は一般以上貴族未満だろう。たぶん。

ファンタジー系の転生モノで確定のようだ。

ケガをした時に、母親が治癒魔法を使ってくれた。いいね。治癒魔法。スバラシイ。

まだ、世界情勢とかは解らないが、治癒魔法を憶えて損はないはずだ。

ファンタジー系ってことは、RPGみたいな世界観ってことだ。

治癒魔法至上主義とでも言おうか・・・RPGでとにかく優先すべきは治癒魔法だ。という偏った考え方をしている。

いいぞ。治癒魔法。

回復にお金が掛からない。

つまり、装備にお金が回せるんだ。

魔法というと、攻撃魔法に目が行きがちだが、私は断然治癒魔法だ。死ななければいいのだ。

・・・おっと、ついつい暴走してしまった。

そんな訳で、治癒魔法には一方ならぬ思い入れがあるので、がんばって使えるようになりたいと思う。

治癒魔法の才能があるといいなあ。

発声記念日（後書き）

T w i t t e r @ n e k o m i h o n p p o

発声記念日のリリーレルマ（母親）

ウチの子は、ちょっと他所とは違うらしいの。

お母様から、

「子育ては大変よ。夜泣きで夜も寝てられないんだから」とか、

「男の子は大変よ。目を離すとすぐにやんちゃするんだから」とか・・・散々脅されていたのに・・・夜泣きらしい夜泣きを経験したことがないの。

まさか、私が気がつかずに寝ていたの！？と心配になったのだけれど、ノイナも夜泣きを聞いたことがないっていうし。

夜泣きもさることながら、昼間もあまり泣かないの。あまり・・・という表現が控えめ過ぎるくらい泣かないの。

あまりにもおとなしいので、心配になってお医者様に相談したのだけれど、

「心配のしすぎですよ、ランカスター夫人。

お子さんは順調に育っていますよ」

と笑顔で言われてしまって、喜んで帰ってきたのだけれど・・・ウチの子は大人しすぎるのではないかしら？

ノイナに聞いても、

「ウィル坊ちゃんは賢い子です。

こちらの言っていることは理解しているようですし、ダメと言っ

たことは守っているように見受けられます。

確かに、ちょっと静かな感じは致しますが「

なんてことを言うし。賢い子なんて言われてしまって、思わず嬉しくなつて頬が緩んでしまつたわ。

それにしても、子供つて不思議。

何を言っているのか理解しようとしているのか、じつところこちらを見つめてるの。

こちらが気がついて尋ねてみると、

「ん？」

つて首をかしげて・・・もう可愛くて可愛くて、思わずだっこしてしまつわ。

不思議と言えば、不思議な遊びをするのね。

部屋の隅の方で、

「あー」

とか

「うー」

つて言っていたかと思うと、

「あーえういううえーおあおー」

とか呪文みたいなこと言い始めるし。

ノイエに聞いても、

「初めて聞きました」

つて言うし。

あれは何なのかしら？

可愛らしいからだっこしてしまつただけねど。

もうすぐ2歳になるうかという頃に、ウィルがしゃべってくれたわ。

もう嬉しくて嬉しくて・・・ウインなんか、もう大喜び。

「とうさま、かあさま」

なんて可愛らしい声で呼んでくれて、ウチの子は天使なんじゃないかって思っちゃった。

でも、いきなり、

「とうさま、かあさま」

なんてしゃべったので、ノイエも驚いていたわね。

ウチのウィルは知識欲の塊ね。

「かあさま、あれはなに？」

「これはなに？」

と質問責め。

色々な物に興味津々で聞いてくるわ。

そういえば、ノイエがお手伝いさんだっことを理解していたみたいだけれど・・・ノイエにでも聞いたのかしら？

ドンドンドンガン！という音が聞こえて、慌てて廊下に出たら、ウィルが階段から落ちて倒れていたの。

慌てて叫びそうになってしまったけど、落ち着いて深呼吸を繰り返したわ。

私が慌てるとロクな事がない。

まずは落ち着けて散々、お母様に言われていたからかしら。

「ウィル坊ちやま。大丈夫ですか？」

ノイエが駆けつけて声を掛けてくれたの。

冷静になってからウィルの様子を見ると、頭を軽く切ってしまったみたい。

頭なので血が凄いことになっているのだけれど、ウィルが、

「ノイエ、かあさま・・・だーじょぶです。
ていけつをおねあいています」

ってしっかりとした受け答えをしたので、かなり落ち着けたわ。
ウィルをそっと抱きしめて、

「聖なる魂よ。どうか、私の息子、ウィルの傷をお癒してください」
と、ヒールを唱えたので、傷は治ったの。

「かあさま・・・いまのは・・・まほーですか？」

「ええ、そうよ。癒しの魔法。もう大丈夫かしら？」

「あい。だーじょぶです。それよりも、まほーのことをおしえてく
あさい」

もう、目をキラキラさせて、魔法に興味津々。

まだ難しいと思うのだけど・・・熱心に聞いていたわ。

将来は大魔道士でも目指すのかしら。

発声記念日のリリーレルマ(母親)(後書き)

T w i t t e r @ n e k o m i h o n p o

誤字修正

訪ねる 尋ねる

会話前後に空行追加

ヒーラーを試した日

この世界は魔法があることが解った。

大きく分けると3種類。

魔方陣や正確な呪文を唱えることで発動する呪印魔法。

神様(?)へのお伺いを立てることで発動する神聖魔法。

・・・むしろ申請魔法なんじゃないか？

とか余計なツツコミをしたりもするが。

後は、精霊との対話により発動する精霊魔法。

理屈は解っていないようなのだが、魔法を使うには素質が必要らしい。

MPの無い人には使えない・・・みたいなモンのようだ。

そのため、世界中の誰も彼もが魔法を使えるということは無く、一部の選ばれた人間だけが使える・・・と言ったような選民思想もあるらしい。

素質は遺伝しやすらしく、魔法使いの子供は魔法使いの素質があることの方が多いようだ。

数としては、呪印魔法>神聖魔法>精霊魔法となっている。

やはり、精霊と意思の疎通するのが難易度を高めるらしい。

その代わりと言っては何だが、意思の疎通で発動するため、小難しい手続きとか、お約束事が無いため、柔軟性は抜群。

逆に、呪印魔法は、魔方陣だの、呪文だのがガツチガチに決まっているらしい。

神聖魔法はその中間。

神様にお伺いを立てるとのことなのだが・・・別段、神の声を聞いたとか、そういう宗教的な事は無いらしい。

とは言え、身体を治すつてのは、神の奇跡と呼ぶに相応しく、宗教

と結びついているようだ。

魔法の所為で・・・所為と言い切ってしまうのもどうかと思うが・・・科学の発展は遅れている。
物理、化学、自然科学、人体、病理学、e t c、e t c・・・これらがかなり遅れている。

大抵のことは、魔法で片が付いてしまうからだ。
例えば、建造物には物理、数学などが必要なのだが・・・専門外なのでよくは解らないが・・・強度が足りなければ魔法で補えばいいのだ。

と言うか、魔法で強化するのがアタリマエになっている。
人体に関しても研究は進んでいない。魔法で治せばいいのだ。
人間、楽をするとダメだな。

天文だけは、占星術の絡みで結構進んでいる。
あと、魔法学も当然ながら進んでいる。
進んでいるのかは、よく解らないが、歴史は古いらしい。

ヒールっぽいモノを試してみたい。
もどかしいことこの上ないのだが、そうそう、ヒールを掛ける対象が居ない。

まあ、そりゃ、そうだ。
けが人が居た所で、3歳の子供にヒールをさせる馬鹿者は居ない。
と、なると、動物にでも・・・とは言え、これまた、素直にヒールを受けてくれるとも思えない。
さて、困った。

と、なると、植物にでも・・・とは言え、これまた、効果が解りにくいのが問題だ。
等々、もやっとな問題を考えながらうろついていたら、町を出てしまった。
やべっ。

さっさと戻らないと。

と、思っていたら、目の前に枯れた森が広がっている。

町の隣に、こんな寂しい風景が広がっているとは思わなかった。

「ふむ」

この枯れ木が、死んでしまっていたら、どうにもならないが、もし・
・もし、万が一、生きていたら・・・ヒールが効くんじゃないか？
と思いついてしまった。

町に戻るのヒールを試してからでも遅くはないか？

・・・ってことで試すことにした。

枯れ木に手をかざし、目をつぶる。

「ヒール」

・・・ダメか。

何も起こらないな。

そもそも、神聖魔法らしからぬ唱え方じゃだめか。

「我、彼の者を癒すことを願いたてまつらん。ヒール」

前に母様が使った呪文が思い出せないので適当だ。

こんなのでいいのかわかどうかは解らないが、身体から何かが抜ける感
じがして気だるくなった。

ちなみに、ヒールと唱えただけでは気だるくなったりしない。

それっぽい呪文を加えることで気だるくなる感が追加された。

ってことは、ヒール・・・かどうかは解らないが、何かが発動した
んだろう。

見た目、なんら変わりはないが、ちゃんと発動したんだろうか？

まあ、枯れ木が急にみずみずしくなっても気持ち悪い。

時間が掛かるんだろう。

もう一発くらい撃ち込んでおくか。

「我、彼の者を癒すことを願いたてまつらん。ヒール」
気だるさが一気に増した。

いかん。立ってるのも億劫だ。

なるほど。

これがMP切れ状態か？

座りたくてしょうがない衝動を抑え込みつつ、取り敢えず、町へ戻った。

2発でMP切れとは情けない。

情けないが、枯れ木相手なら誰も困らないし、実験には良いかも。

ばれて大事になっても面倒だし・・・街道から少し奥まった所で実験することにしよう。

今日は、良い収穫であった。

満足である。

はっはっは。

次の日から、2mほど奥まった所の木に毛糸を結び、ヒール実験を開始した。

2日後には、枯れ木に花・・・ではなく、芽吹いてきた。

自分のヒールに効果があったことが解り、小躍りしてしまった。

が、一週間後には、再び枯れてしまった。

別の木々も同じ状態になったことから、根本的に何かが間違っているらしい。

とは言え、何が間違っているのか解らないので、日々、ヒールを続けた。

三週間も経とうかという頃、ふと思い至った。

そもそも、枯れた原因は何だったのか？

原因も取り除かずにヒールをした所で、穴の空いたバケツに水を注いでいるだけではないのか？

さて・・・植物の専門家ではないので、植物の病気が解らない。これでは、単純にヒールのスパルタをしているだけではないか。

まあ、その甲斐あって、ヒール3発まで撃てるようになったが・・・それはそれ。

相手の状態を調べる手段があっても良さそうだ。

再度、枯れてしまった木に手をかざし、目をつぶる。

「我、彼の者の不調を知ることがを願いたてまつらん。リサーチ」
かなり適当な呪文ではあるが、そういう適当さを寛容に受け止めてくれるのが神聖魔法のいい所・・・というかいい加減な所。
まあ、機能というか、効能が無かったら発動しないけどね。
目をゆっくり開けると、枯れ木にぼんやりと色が付いている。
色が付いているというか、もやもやがまとわりついている。
ほとんどは、白というか灰色なのだが、地面・・・恐らく根っこがあるであろう部位が赤い。

つまり、根っこに病気があるのかな？

病気の詳細が解らないが、治せるもんだろうか？

ま、治ったらラッキーくらいの意気込みでやってみますか。

「我、彼の者の異常を取り除くことを願いたてまつらん。リコンディション」

赤い部位が青く光り、明滅を繰り返した後、薄い緑になって白に変わった。

治ったってことだろうか？

「我、彼の者を癒すことを願いたてまつらん。ヒール」

・・・さて、こいつはしばらく様子見だな。

ってことはだ・・・今までヒールしてきた木は、全てやり直しか。やれやれだ。

リサーチは、それほどでも無かったが、

リコンディションは、気だるさが多い気がするな。

今のMPでは無理があるってことだろうか？

今のMPだと、リサーチ、リコンディション、ヒールでほぼすっからかなだな。

ま、続けていれば、MPも増えるだろうし・・・まだまだ若いんだ。
どうとでもなるだろう。

本日作業分目印の毛糸をくくりつけ、町に戻ることにした。

ヒールを試した日(後書き)

Twitter @nekomihonpo

ヒールを試した日のノイナ（家政婦）

「ウイル坊ちゃま〜？ウイル坊ちゃま〜？」

お屋敷の中をお探しいしたのですが、見当たらず、今は庭を探してさまよっているのですが・・・見当たりません。
ウイル坊ちゃまは、どこに行かれたのでしょうか？
万が一・・・ということも考えられます。
早くお探しせねば！

「あらあら、ノイナ。どうしたの？」

「あ、リリー奥様。」

も、申し訳ありません。

先ほどから、ウイル坊ちゃまのお姿が見当たらないのです」

ちよつと目を離れた際に・・・なんてのは言い訳にしかありません。
ひたすらに謝り、一刻も早く探し出さねばなりません。

「あら、それなら・・・」

「え？」

「少し前に、

『かあさま、町をみてきます』

って言うので、

『気をつけて行ってらっしゃい』

って見送ったのよ。

ノイナに伝えておくべきだったわね。

「ごめんなさい」

「いえ・・・私のことはいいのですが・・・ウイル坊ちゃま、お一人で行かれたのですか？」

「そうねえ。」

お友達と行くとは聞かなかつただけけれど」

い、いくらなんでも放任主義過ぎます。

こ、これは急いでお探しせねばなりません。

「お、奥様。

いくらなんでも危険過ぎます。

ウィル坊ちゃまは、しっかりしたお子ではありますが、まだ3歳です。

誘拐・・・は無いかと信じていますが、大人の力には逆らえませ
ん。

どこかでケガをしているかも知れません」

「あらあら。

確かに、そういう心配はあるかも知れないけれど・・・ノイナは
心配しすぎじゃないかしら？」

「いいえ、奥様。

心配しすぎということとは、決してありません」

「男の子なんですから、少しくらい、やんちゃでもいいと思つのだ
けれど？」

奥様がやんちゃ過ぎます！・・・とは言えない私。

「私、急いで探しに行つて参ります」

「あらあら。そう？悪いわね」

「では、行つて参ります」

取る物も取り敢えず、町に出て聞き込みです。

買い物なじみのおやつさんから有力情報を得ました。
なんでもウイル坊ちゃまらしき子供が、町の外の方へ歩いて行った
そうです。

何故、そこでお止めしないのかっ！

と理不尽なことを言いたくもあつたのですが、まずは坊ちゃまの安
否が大事です。

こちらの外には枯れ森しかなかったはず。
誘拐の危険も少ないはずです。

枯れ森には、危険な野生動物も居なかつたはずです。
ある意味、一安心と言つた所でしようか。
町の外へ急ぎましょう。

「あれ？ノイナさんじゃないか。
そんなに急いでどこに行くんだい？」

「あ、ジャックのおやじさん。
ご無沙汰しております。」

ウイル坊ちゃまが、こちらの方に来たと聞いて、大急ぎでやつて
きたのです。

見かけませんでしたか？」

「ウイル坊ちゃんつてくと、ランカスターんとこの坊主だな？」
「はい。」

まだ3歳の小さな子なのですが、枯れ森の方へ歩いて行つたとい
う話を聞きました……」

「ふむむ……じゃあ、あれが坊ちゃんだったのかな？」

「！？……何かご存知なのですね！？」

「あ、ああ……なんか小さい坊主が、肩を落としながら町の中心
へ向かつているのを見たからな」

「ええっ！？」

い、いつですか!？」

「ああ、それこそ、今しがただよ」

な、なんとということでしょう。

これは急いで戻らなければなりません。

「私は急いで追わねばなりません。

貴重な情報、ありがとうございました。

また、お店の方には、今度寄らせていただきます」

「あ・・・ああ・・・すぐに追いかければ見つかるぞ」

「はい!ありがとうございます。」

それでは失礼します」

なんとということでしょうか。

いえいえ。

貴重な・・・それこそ珠玉な情報を頂きました。

急いで町中に戻りましょう。

「ウイル坊ちやま〜!」

あれからすぐにウイル坊ちやまを見つけることができました。

ああ、ご無事で何よりです。

お手々を引いて家に帰りました。

それからと言う物、ウイル坊ちやまが、町へ出かけているようなのです。

ふと、半刻（35分程度）〜1刻（70分程度）ほど、ウイル坊ちやまを見かけない日があったのです。

思い返してみると、毎日、半刻程度見かけないのです。

リリー奥様と一緒になのかと思い、確認を試みたのですが、

「ノイナと一緒にだったんじゃないの？」

との仰せ。

こっそりと抜け出しているようなのです。

本当に、本当に偶然、買い物途中で、ウイル坊ちゃまらしい後ろ姿を見かけたのですが、その日は見失ってしまいました。

ウイル坊ちゃまに限って、悪さをしているとは考えにくいのですが、もし、ここでウイル坊ちゃまが悪の道に走ってしまったては、ランカスター家の家事を預かる身の名折れ！

なんとしても確かめねばなりません！

と、心に誓って、こっそりと監視しているのですが・・・今日もまた、気がつくとおりませんでした。

「ウイル坊ちゃま？」

ヒールを試した日のノイナ（家政婦）（後書き）

Twitter @nekomihonpo

まだまだ駆け出しの段階で評価をいただき、ありがとうございます。
その評価に恥じぬよう・・・ご期待に添える展開を書くことが出来
ればと思っております。では。

誤字修正

会話前後に空行追加

前世の記憶に苦しんだ日（前書き）

余談編

前世の記憶に苦しんだ日

4歳にもなれば、色々学んでも不思議は無いだろう。
無いよな。

うん。

つてことで、父様や母様、ノイエを質問攻めにして、知識を蓄えている最中だ。

まずは身近な所から。

父様の職業は公務員。

宮仕えつてのが正しいのだが、公務員じゃん。

厳つい顔の割に・・・文官とのこと。

文官にしては立派な体躯だと思っただが・・・文官だそうで。

何でも、王直属の組織で、直務国税特捜査察官と言っらしい。

えっと・・・マルサって奴ですか？

言葉の響きがデスクワーク似合わない感じなんですけど・・・父様

曰く、文官だそうだ。

王直属だけあって、公務員の中では貰いの多い職業らしい。

そんな訳で、我が家にはノイエというお手伝いさんがいる訳だ。

ノイエは、母様と幼なじみとのこと、母様のことをよく解っている感じがする。

母様の天然というか、おっとり具合に振り回されていることも多いが・・・関係は良好だ。

ノイエが成人になるちよつと前に、ご両親を亡くしてしまい、母様の家で厄介になったのが、お手伝いさんになる契機らしい。

私が産まれたのは、アルバ・ヨルド王国というアルバ地方のヨルド

王家が治める国だ。

現在の王は、フィーというお名前だそうで・・・フィヨルドかよ！と突っ込みを入れたくなってしまうた。

突っ込みを入れた所で誰にも理解されないのだが・・・悲しい。

比較的、中規模な王国で安穩とした生活を送ることが出来ている。国家間で戦争とか起こらないのか心配になって、父様に聞いてみたのだが、

「ノラとかクロの脅威があるからね。

国家間で争っている場合では無いんだよ。

時には大侵攻があつて、国家間で協力しないとイケないからね」

「ノラとかクロですか・・・ノラとかクロって？」

「ああ、そうだな・・・ノラってのは大型の原生動物だな。

大きな牙を持っていたり、素早い動きで飛びかかってきたり・・・大人二人分や三人分はあつたりするからね。

さらに大型のノラは、十人分くらいもあつたりするんだ。

クロってというのは・・・そうだな・・・闇の眷属って呼ばれている者達だ」

「闇の眷属・・・ですか」

「そうだね。

町中には居ないけれど、死体が動いたり、人の生き血を飲んだり、呪いを掛けたり・・・という者達だよ」

「そうですか。

そういう脅威があるから、一致団結して、人々を守っているんですね」

「ああ、そうだよ」

ってことで、国家間というか、無意味な戦争がないのはいいことだ。っていうか・・・ノラク かよ！と突っ込みたい。

実に突っ込みたい。
突っ込んだ所で、本当に誰にも理解されない。
なんだ、このもどかしさ。

『くっ！前世の記憶が俺を苦しめる！！』

とか言うとか格好いい感じになって、厨二病っばいけど、内情は実にくだらない。
くそっ。

「前世の記憶が俺を苦しめる！！」

・・・想定外です。

前世の記憶に苦しんだ日(後書き)

T w i t t e r @ n e k o m i h o n p p o

誤字修正

納める 治める

会話前後に空行追加

ケンカをした日（前書き）

ここ数話、いじめ、虐待（を臭わせる）表現が出てきます。苦手な方は飛ばして下さい。

ケンカをした日

日課のヒールをするべく、枯れた森へ向かう。

かれこれ2年も続けていれば、ヒールの回数も増え、生い茂ってきた樹木も1000本近くになっている。

・・・本数を数えるのが面倒なので数えていないが。

念のために追跡者の目くらましをかねて町中を右往左往。

まあ、これも日課になってはいるのだが・・・

そろそろ町外れにさしかかろうかという下町のさなか・・・見た目、自分より幼い感じの女の子が泥団子を投げつけられている。

おいおい。ブラザーメンソウル、女の子をいじめるなんてどんな見だい。

ゴッ！

「あつ」

今のは石か!?

「おい、やめろっ」

主犯格というか・・・ガキ大将が振り返る。

自分より3歳か4歳上かな？

・・・子供はようワカラン。

「なんだ、このガキ？どこのガキだ？」

「さあ、どこいらじゃ見かけない顔ですね」

「寄つてたかつて、女の子をいじめるとは、ずいぶんと格好いい」としてんな！おい」

彼らと女の子の間に立ちはだかる。

「はあ？イミビトなんだから、いいんだよ」

「邪魔だ。どけよ」

「イミビトだかなんだか知らないが、女の子は守るモンだ。それが男ってモンだ」

「いいから、邪・魔・だつ！」

ゴツ！と鈍い音が頭に響く。

殴ってきたか。

そうか、殴ってきたか。

このクソ野郎！

殴り飛ばされたが、意識があればこっちのモンだ。

自分に対してヒールを念じる。

「こんの・・・卑怯者がっ！」

勢いよく起き上がり、勢いそのままに拳を振り抜く。

ゴツ！

いってえ。

コブシ痛いよ。

くそう。

ヒールばっかで身体なんか鍛えてねーよ。

くそう。

相手がゆっくり起き上がってくる。

取り巻きの3人が周囲を取り囲む。

1人だけ壁際で傍観しているが・・・

「いってえな。クソが。」

やっつけてやる。

お前らは手を出すなよ」

「ジャン、やっちまえ」

「クソガキ、覚悟しとけよ」

簡単には逃げられそうに無いな。

倒せるとも思えないし・・・ヒールで身体のダメージは抜けるけど、スタミナとMP不足の気だるさは治らないしなあ。

えっと・・・こういう場合ってのは・・・アゴ狙いで頭を揺らせばいいのか？

こんなナリじゃダメージ出せないだろうし・・・足狙いと思わせつつ、アゴ狙いかな。

等と考えていたら、相手のパンチを避けそこねた。

「くっそ！」

ローキック！

・・・ハズレ。

くっそ。

やっぱ持久戦か。

ケンカをした日(後書き)

T w i t t e r @ n e k o m i h o n p o

誤字修正

会話前後に空行追加

ケンカをした日のイミビト(いじめられっ子)(前書き)

ここ数話、いじめ、虐待(を臭わせる)表現が出てきます。苦手な方は飛ばして下さい。

ケンカをした日のイミビト(いじめられっ子)

・・・あまり出かけたく・・・なかったの・・・けれど・・・お使
いに行かないと先生が怒る・・・から、町に出かけたの。

「忌み人がいるぞ」

「忌み人がこんなトコ歩いてるんじゃないよ」

ビシヤッ

・・・泥団子・・・

ビシヤッ

「忌み人は出てけ」

ビシヤッ

「うわっ、きたねえ」

ビシヤッ

・・・服・・・汚れちゃった・・・怒られる・・・かな。

ゴッ

痛ッ。

キーンッ。と耳鳴り・・・

「おい、やめろっ」

・・・何？

「なんだ、このガキ？どこのガキだ？」

「さあ、ここいらじゃ見かけない顔ですね」

「寄つてたかつて、女の子をいじめるとは、ずいぶんと格好いい」としてんな！おい」

何？・・・この子・・・誰？・・・何？

「はあ？忌み人なんだから、いいんだよ」

「邪魔だ。どけよ」

そう。・・・忌み人だもの・・・仕方・・・ないの。

「イミビトだかなんだか知らないが、女の子は守るモンだ。それが男つてモンだ」

「いいから、邪・魔・だつ！」

ドカッ

・・・ボクの目の前で、男の子が・・・殴られる。

「あ・・・」

やめて。・・・この子は関係・・・ない。

「こんの・・・卑怯者がっ！」

・・・忌み人なのは・・・ボク。

「いつてえな。クソが。やっつけてやる。お前らは手を出すなよ」

でも・・・声が・・・出ない。

・・・怖い。怖い。怖い。

「ジャン、やっちまえ」

「クソガキ、覚悟しとけよ」

どうしたら・・・いいの？

・・・目の前の男の子の方が・・・小さい。

・・・勝てる訳・・・無い。

「くっそ！」

・・・忌み人のボクなんかのために・・・ボロボロにされちゃう。

・・・どうしたら・・・どうしたら・・・

・・・怖い。怖い。怖い。

『ピリルルル！ピリルルル！』

「やべえ。イヌだ」

「ジャン！巡視が来るぞ」

「そんなガキほっとけ」

巡視官が・・・来る？

・・・助かった・・・の？

・・・よかった。

・・・ぼろぼろ・・・だけど、大けがは・・・無い？

「ふう。・・・とは言え、こっちも逃げた方がいいかな？

ねえ、行くよ？」

何？・・・手を握られた。

「あ……」

だめ……だよ。

……忌み人に触れたら……よくないよ？

「面倒はごめんだから行くよ？ほら」

「え……」

や……引っ張られる。

……ここ……町の外……

「はあはあ」

……こんなところまで……来ちゃった。

「はあはあ」

「はあ……ごめんね。ちょっと傷見せてね」

「え……」

……男の子が頭に……触る。

「痛ッ」

「あっ、ごめんね。」

「ちょっと待ってね」

「え……いい……だ、大丈夫だから」

「ちょっと傷口濡らすよ〜」

「や……だ、大丈夫だから」

「じゃあ、ちょっとじっとしててね〜」

聞いて……くれない。

……近くの小川で……布を濡らして……当ててくれた。

……目をつぶって片手をかざしてるけど……何をしてる……の？

「我、彼の者を癒すことを願いたてまつらん。ヒール」
「えっ!？」

……頭を触ってみる。

「……痛くない」

「ん。傷も残ってないし、大丈夫そうだね」

「な……何をしたの？」

「ちよつとヒールをね。」

……それより、汚れちゃったね。ウチに来なよ」

……ヒール!？」

「ねえ、ウチに来て身体を綺麗にしよう?」

「え……だめ」

びっくりして……手を振り払う。

「!……ごめん……なさい……ボク、忌み人だから……」

ボク……走って、その場から……逃げ出しちゃったの。

男の子が何か言っていたけど……よく聞こえなかったの。

何故か……涙が出てきて……止まらなかったの。

ケンカをした日のイミビト(いじめられっ子)(後書き)

Twitter @nekomihonpo

修正内容

会話前後に空行追加

私の目の前 ボクの目の前

人さらいの日（前書き）

ここ数話、いじめ、虐待（を臭わせる）表現が出てきます。苦手な方は飛ばして下さい。

人さらいの日

昨日はまんまと(?)逃げられた。

予想外の展開に為すすべ無く逃がしてしまった。

うむ。不覚。

イミビトが何だか解らなかつたので、母様に聞いてみた。

「忌み人と言つて、迫害・・・そうね、いじめられている人よ。

彼らは何も悪くないのだけれど、いじめられ続けることで、悪いことをしてしまう人も多いわ」

との事だ。

迫害されている理由までは、教えてくれなかつたが、恐らく色々あるのだろう。

さて、今日はだ・・・

昨日のあの子を探すため、下町にやってまいりました!じゃん。

はい。簡単に見つかる訳ありません。

ですよ〜。

忌み人さん、どこに居ますか?等と喧嘩を売って歩く訳にも行きませんし。

地味に困りましたね。

「こんにちは」

「ん?」

後ろから声を掛けられたようなので、振り返ると、昨日のいじめのお仲間が居た。

「無事に逃げられましたか?」

雰囲気から、昨日の続きを今ココで！という感じでは無いのだが、
気安く話しかけられるような友好的な関係でも無かったと思うのだ
が・・・と、思い出した。

1人、離れて見ていた子だな。

「そうですね。」

喧嘩も長引かずに済みましたし」

「キミは面白い子ですねえ」

「・・・ガキ大将のお仲間じゃないんですか？」

「ガキ大将？・・・ああ、ジャンの事ですか。」

いや。お仲間ですよ？

まあ、手下って訳でもありませんがね」

なんとも、ませた感じのする子だな。

「で、そんなお仲間さんが、何用ですか？」

昨日の続き・・・という訳でも無さそうですが？」

「ちよつと確認をね・・・キミはヒールが使えるんですか？」

「へえ。バれてましたか。」

そうですね。ヒールです。

どうします？卑怯者とでもなじりますか？」

「いやいや。」

喧嘩つてのは自分の力でやるモンだと思えますよ。

そのヒールだってキミの力ですからね。

ただ、子供にしては凄いなと思ひましてね」

「・・・変な人ですね」

「いやいや。」

ヒールが出来るような凄い子とは友達になつておいた方がいいか
な？と思ひましてね」

「いじめの仲間になれ・・・と？」

「ああ・・・それは・・・うん。いじめたくていじめてる訳じゃないんですがね」

「理由はどうでもいいですよ。」

「僕はあの子の味方です」

「・・・嫌われてますかね？」

「好かれる理由があるとでも？」

「・・・無いですかね。」

仲間になると、いじめられませんよ？なんてのも嫌われそうですし」

「ふう、そうだね。」

好きこのんでいじめられたいとは思わないけど、いじめの仲間にはなりたくないしね」

「取り敢えず、いじめの話はやめましょうよ？」

「ホント・・・変な人ですね。」

「・・・もう行ってもいいですか？」

「ええ。呼び止めてすいません。」

「お急ぎですか？」

「ふむ？」

「・・・つかぬ事を聞きますが、昨日の子がどこにいるか知りませんか？」

「はあ？キミも不思議な子ですね。忌み人を探しますか」

「ええ。ちよつと探しています」

「ミレイは、この先のハズレの孤児院に居ますよ」

「ミレイっていうのか・・・」

「名前、聞かなかつたんですか？」

「・・・逃げられたんですよ」

「ぶ・・・ふはははっはは」

笑われた。思いつきり笑われた。

くそう。

そんなに楽しいか。

くそう。

自分でも間抜けだとは思ってたさ。
再認識させないでくれ。

「・・・わ、笑うなよ」

「いやいや。すみません。ぷは。

いやいや。名前も知らないのに探してるんですか」

「ああ・・・ちよつとね」

「ついて行っても？」

「はあ？・・・うん？」

「邪魔はしませんよ？」

「誤解されて逃げられても困るからやめとく」

「・・・そうですか。そうですね。

残念ですが、邪魔はしないと仰いましたし」

「こっそり付いてくるのも無しだぞ」

「ええ、解ってますよ。

「そうそう。お名前を聞いても？」

「普通、自分から名乗るモンですよ？」

「まあ、お約束だからいいけどさ。

「ウイル。ウイル・ランカスター。5歳だ」

「5歳！？すごいですね。

「アルフ・ニナカ。7歳です」

「アルフ・・・でいいかな？変な奴だな」

「ウイルほどでは、ありませんよ」

「まあ、いいや。助かったよ」

「礼にはおよびませんよ」

妙にませたというか、クールを決め込んでるのか、本当にクールな

のか・・・いまいち判断が付かないが、思ったより面白い奴だ。

まあ、それはそれ。

教えられた方へ行ってみると、予想に反して、立派な建物が見えた。これが本当に孤児院なのか？

表札は出ていないようだが・・・孤児院が儲かる事業とはこれっぽっちも思えない。

なんでこんなに立派な建物なのか？
ぐるっと建物を一回り。

表の立派な建物に隠れるかのように、裏にひっそりとボロ屋敷が見えた。

こっちが孤児院なんだな。

と言っつのは解る。

じゃあ、表のは何だ？

別の建物・・・には同じ敷地に建っている。

同じ敷地とは言っても・・・

ぼろ屋敷は倉です。と言われても不思議はないくらい

端っこに追いやられているし・・・

それにしてもボロだ。

・・・とにかく酷い。

そのボロ屋敷の裏（？）に昨日の子・・・ミレイと言ったか・・・が居た。

昨日は泥で汚れてしまったが、

今日は黒髪がうっすらと蒼く光って綺麗な子だ。

ボロボロの堀をぐぐり抜けて、まずは挨拶だ。

「こんにちは」

「!?!?・・・こ、こんにちは」

「少し、お話してもいいかな？」

「……だめ」

……とりつく島もないってのは厳しいです。
母様……めげそうです。

「それは……忌み人だから？」

「……そう。……ボク、忌み人だもの」

「うん。僕は気にしないよ？」

「……気にした方が、いい」

え？

いやいや。

気にしないって言ったのに……気にした方がいいとは……面白
い返しだ。

「まあ、いや。

僕の名前はウィル。ウィル・ランカスター。

君の名前は？」

「え？……えつと……ミ、ミレイ」

「そっか。ミレイ……よろしくね」

と右手を差し出す。

「えつと……」

おずおずと右手を差し出してきたので、こちらからシェイクハンス。

「うんうん。

じゃあ、ミレイとは友達ってことでいいよね？」

「え？……な、何？」

「何か急ぎの用事ある？」

「えっと・・・何も無い・・・けど？」

「じゃあ、行こう」

かなり強引だけれども、握手したついでにそのまま引つ張って移動を開始した。

「や・・・ま、まって」

いきなり家に連れて行ってもいいんだけど、それもハードルが高そうなので、取り敢えず、枯れ森の奥に連れて行こう。

あそこなら、人も来ないし、最近では果実もあるし、おもてなしも出来そうだ。

どうも、あまり人目に付きたくないようなので、裏道、人気のない道、町の外縁を選んで移動する。

言葉では軽く戸惑いと否定を口にするが、身体を突っ張ってまでの反発はない。

つてことで、嫌がる言葉は全て無視した。

うん。我ながら外道っぽい。

これでは悪役では無いか。

よいではないか。

よいではないか。

・・・うん。

ま、いつか。

「わあ・・・」

枯れ森の奥に到着。

「ここ・・・枯れ森？」

「・・・入り口は枯れ森・・・だったのに」
「そうだよ。枯れ森だよ」

「あう・・・ボクを連れ出して・・・どうするの？」

「ああ、まあ、友達になりたいから・・・かなあ？」

「・・・忌み人なの？」

「忌み人つてのが解らないからね」

「・・・変なの」

「そうかな？」

「まあ、いいや」

「・・・いいんだ」

「果物食べる？」

「・・・果物！？・・・えつと・・・」

「遠慮しないでいいよ。森の果物だし」

「・・・大丈夫？」

「大丈夫じゃないかも」

「え！？」

「忌み人と友達になりたいって病気になっちゃっ」

「え！？」

「・・・えつと・・・大丈夫？」

「・・・そんな目で見ないで」

失敗するといたたまれない。

実にいたたまれない。

いたたまれなさすぎるので、赤い果実をもぎ取る。

アダムの果実というらしいが・・・リンゴに似ている。

どう食ってもリンゴに似ている。

アダムとイブの禁断の果実かよ！

突っ込みを入れたくなかったが、神話とか関係無いらしい。

アダム家で流通を取り扱ってるかららしい。
なんだ、その理由。

スイカをアダムさん家で扱ったら、それもアダムの果実か？
と思うのだが、どうも果物の流通の祖らしい。

らしい・・・ってのは、アダム家が既に没落しててうんぬんかんぬ
ん。

要するに解らないらしい。

いい加減すぎる。

それはそれ。

ほんと、リンゴまんまなので、そのまま食べられる。

枯れ森でのおやつにはありがたい。

「ほら」

「・・・いいの？」

「うん。僕のじゃないしね」

「・・・えっと・・・頂きます」

ミレイが小さくお辞儀をして、両手で小動物みたいに食べる。
うん。かわいらしい仕草だ。

身だしなみも整えれば、かなりかわいいんじゃないか？

「・・・おいしい・・・」

ぼわっとした笑顔だ。

前髪が気になるな。

ちよっと手で軽く前髪を上げてみる。

「や!?!?・・・な、何？」

「あ、ごめんね。」

僕のご事は気にせず、食べてていいよ。

それとも、もつと持つてくる?」

ふるふると否定。

「あまり・・・幸せになると・・・後がつらい」

何を言っているんだ。

シヨックだった。

リンゴ1個で・・・しかも森の果実だ。

タダで手に入れた果実1個で・・・幸せと言えてしまう境遇。

ものすごくシヨックだった。

他にも色々シヨックな事があるんだが、どうしても気になったので、彼女の手を取った。

「手、見せてね」

「え・・・や!」

否定はするけど、強烈な否定はない。

彼女の手を取って見る。

不自然なやけどの跡が多い。

「我、彼の者の不調を知ることをお願いたてまつらん。リサーチ」

だめか。

特に不自然な点は見受けられない。

やけど跡だからか・・・治ってるしなあ。

治ってるモンはダメだろうなあ。

「我、彼の者を癒すことを願いたてまつらん。ヒール」

ダメかあ。

「あう・・・あ、あの・・・」

「ごめんね。」

僕のヒールじゃ、やけどの跡は消えそうにないや。

まだまだ子供だから、そのうち目立たなくなるとは思っけど・・・このやけどは・・・どうしたの？」

「・・・灰皿なの」

「は？灰皿？」

「・・・うん。・・・忌み人だから」

どういふことか理解したのと同時に、自分でも頭が沸騰するのが解った。

孤児院の大人が、ミレイを忌み人だからと虐待している！

あまりの薄汚さにめまいがした。

このままじゃダメだ。

ミレイが本当にダメになってしまう。

「ミレイ・・・ウチに行こう」

強い調子で言った。

「・・・やー！」

更に強い調子で、手を振りほどかれた。

「え？・・・ど、どうして？」

「・・・親との仲・・・悪くなっちゃっ」

言うが早いのか、彼女は駆けだしてしまった。

「え？」

すぐに追いかければ、追いつけたのだろうか、
何というか・・・あっけにとられて、追いかけるどころではなかつた。

親との仲が悪くなる？

どういうことだ？

えっと・・・

普通の親ならば、忌み人を嫌う？

忌み人を連れてきた子との関係がまずくなる？

ってことだろうか？

説明を求めようにも、逃げられてしまったし・・・

また明日にするか。

まずは・・・一応、母様に断りを入れておくか・・・

人さらいの日（後書き）

Twitter @nekomihonpo

感想、評価ありがとうございます。

ミレイの「・・・」が多いのは意図的です。

自分でもちよっとウザいかな？と思いますが、表現とお目こぼしただければ幸いです。

人さらいの日のアルフ(いじめっ子)(前書き)

ここ数話、いじめ、虐待(を臭わせる)表現が出てきます。苦手な方は飛ばして下さい。

人さらいの日のアルフ（いじめっ子）

学院が休みなので暇ですね。

ジャンは家の手伝いで忙しいでしょうから、本当に暇です。

ぼくっと町ゆく人を眺めていると、さつきからちよるちよると行ったり来たり・・・昨日のちよっと生意気な子ですね。

喧嘩の最中に、自分にヒールをしているように見えたのですが・・・あんな小さい子が、ヒールを使えるモノなんですか？

そもそも、無詠唱のヒールなんて可能なんですか？

しかも、結構な回数を自分にヒールしているように見えました・・・そんなにヒールを使えるモノでしょうか？

特殊体質で超回復を持っている可能性も否定できませんね。

疑問だらけです。

口口に聞いてみたいところですが、休み明けまで無理ですね。

・・・本人に聞いてみますか。

「こんにちは」

「ん？」

「無事に逃げられましたか？」

警戒されていますかね。

なんとも仕方ないですが。

「そうですね。

喧嘩も長引かずに済みましたし」

・・・おや？対応をしてくれるようです。

「キミは面白い子ですねえ」

「・・・ガキ大将のお仲間じゃないんですか？」

「ガキ大将？・・・ああ、ジャンの事ですか。」

いや。お仲間ですよ？

まあ、手下つて訳でもありませんがね」

ガキ大将ですか。

そうですね、ガキ大将ですね。

「で、そんなお仲間さんが、何用ですか？

昨日の続き・・・という訳でも無さそうですが？」

「ちよつと確認をね・・・キミはヒールが使えるんですか？」

「へえ。バれてましたか。」

そうですね。ヒールです。

どうします？卑怯者とでもなじりますか？」

「いやいや。」

喧嘩つてのは自分の力でやるモンだと思えますよ。

そのヒールだってキミの力ですからね。

ただ、子供にしては凄いなと思ひましてね」

本当にヒールでしたか。

結構な回数、使っていたように見えたのですが・・・あまり疲れていたようには見えませんですし・・・

「・・・変な人ですね」

「いやいや。」

ヒールが出来るような凄い子とは友達になつておいた方がいいかな？

と思ひましてね」

「いじめの仲間になれ・・・と？」

う・・・厳しいところを突いてきますね。

「ああ・・・それは・・・うん。」

「いじめたくていじめてる訳じゃないんですがね」

「理由はどうでもいいですよ。」

「僕はあの子の味方です」

「・・・嫌われてますかね？」

「好かれる理由があるとでも？」

「ごもつともですね。」

「・・・無いですかね。」

仲間になると、いじめられませんよ？なんてのも嫌われそうです

し

「ふう、そうだね。」

好きこのんでいじめられたいとは思わないけど、いじめの仲間にはなりたくないしね」

実際に、耳に痛い話ですね。

「取り敢えず、いじめの話はやめましょうよ？」

「ホント・・・変な人ですね。」

「・・・もう行ってもいいですか？」

「ええ。呼び止めてすいません。」

「お急ぎですか？」

「ふむ？」

「・・・つかぬ事を聞きますが、昨日の子がどこにいるか知りませんか？」

「はあ？キミも不思議な子ですね。」

「忌み人を探しますか」

「ええ。ちよつと探しています」
「ミレイは、この先のハズレの孤児院に居ますよ」
「ミレイっていうのか・・・」
「名前、聞かなかったんですか？」
「・・・逃げられたんですよ」
「ぷ・・・ふはははっはは」
「・・・わ、笑うなよ」
「いやいや。すみません。ぷは。
いやいや。名前も知らないのに探してるんですか」
「ああ・・・ちよつとね」

是非とも見てみたいですね。
興味が湧いてきました。

「ついで行っても？」
「はあ？・・・うん？」
「邪魔はしませんよ？」
「誤解されて逃げられても困るからやめとく」

ああ、そうですね。

いじめの仲間・・・と思われるも、彼には迷惑でしょう。

「・・・そうですね。そうですね。
残念ですが、邪魔はしないと申しましたし」
「こっそり付いてくるのも無しだぞ」
「ええ、解ってますよ。」
「そうそう。お名前を聞いても？」
「普通、自分から名乗るモンですよ？」
「まあ、お約束だからいいけどさ。」
「ウイル。ウイル・ランカスター。5歳だ」

「5歳！？すごいですね。」

アルフ・ニナカ。7歳です」

「アルフ・・・でいいかな？変な奴だな」

「ウイルほどでは、ありませんよ」

「まあ、いいや。助かったよ」

「礼にはおよびませんよ」

ほんと、面白い人です。

ウイル・ランカスターですか。

口口に紹介したいところですが・・・中々難しいでしょうね。

いじめっ子の仲間・・・のままですかね？

彼がウチの学院に来てくれると楽しそうです。

人さらいの日のアルフ（いじめっ子）（後書き）

Twitter @nekomihonpo

ストックが無くなるので、あまり連続で上げたくないのですが、反応があると、つつい公開したくなる病。

誤字修正

タイトルの「の」抜け

来客の日（前書き）

ここ数話、いじめ、虐待（を臭わせる）表現が出てきます。苦手な方は飛ばして下さい。

来客の日

昨日、母様に断りを入れた後、速攻でミレイを探しに出たのだが、見つからなかった。

さすがに孤児院に乗り込んでまで・・・という勇氣はなかった。

家に帰ってから、父様と母様にミレイの話をした。

2人とも、最初は忌み人つてことで嫌悪感を示したが、最後は連れてきて良いと言ってくれた。

虐待の可能性が決め手になったようだ。

ミレイが、自分と両親との仲を気にした。

というのも効いている。

まあ、コレに関しては、彼女が実に心優しい人であることを示しているし、忌み人ということに関しても誤解があるのかも知れない。

特に父様が虐待に関して怒り心頭の様子。

厳しい顔で怒られると、ちょっと怖い。

涙出そうになった。

まあ、そんな訳で、両親の了解は得られたので、まずはミレイをウチにかっさらう次第。

つてことで、朝から孤児院を張っている訳です。

・・・不審者ですかね。

いや。

子供なんだから大丈夫。

・・・大丈夫。

・・・めげそうです。

お、あれは・・・えっと・・・アルフだったか。

「アルフ！」

「おや？こんにちは。」

「ウィルから声を掛けてくるとは思っていないんですけどよ」

「うん。そうだね。」

それはそれ。

「ミレイを見なかった？」

「今日・・・ということですよね？」

「うん」

「今日は見てないですね」

「そうか。ありがとう」

「・・・なんですか、その・・・もう行っていいよみたいな扱いは」

「いや、行っていいよ？」

「ふう。相変わらず変な人ですね。」

「それで、今日はどうしたんですか？」

「ミレイ待ち」

「はあ・・・ミレイ待ちですか」

「そそ。張り込み中だから行っていいよ」

「じゃあ、張り込みしながらでいいので、話ませんか」

思わず、なんとも言えない顔でアルフを見てしまった。

「ほんと、変な人ですね」

「いえいえ。こんな所で張り込みをしている5歳児ほどではありませんよ
せんよ」

・・・更に何とも言えない気持ちにさせられた。

「新しい遊び・・・ってことはなさそうですね？」

「そうだね。・・・アルフに協力してもらおうか」

「は？」

「うん。悪くない。アルフに協力してもらいましょう。」

是非とも協力してください」

「えっと・・・何をですか？」
「ミレイをちょっとかつさらおうと思っていました」
「は？」
「ちょっとウチまで強制連行しようと思っっていました」
「はあ」
「ちょっと呼び出してきてくれませんか」
「いやいやいや。オカシイですよね。色々と。」
「そりゃあ、もう・・・色々と」
「いいじゃないですか。」
「アルフ！ウイル！で呼び合う仲じゃないですか」
「いやいや。呼び合うだけの仲ですよ」
「まあまあ、細かいことはいいじゃないですか。」
「ここで貸しを作っておけば・・・程度に考えてくださいよ」
「そんな気軽な貸しじゃないですよ」
「ちょっと、うまいこと言って、ウチまで連れてきてくださいよ。」
「あとはこっちでうまくやりますから」
「ウチまでって・・・結構距離ありますよね？」
「あとはって・・・ほとんど終わってますよね？」
「年上なのに小さいことを気にする人ですね」
「はあ・・・まあ、ウイルの家まで連れて行くくらいならいいですけどね」
「え？ほんとに!？」
「・・・なんですか。その反応は」
「いえいえ。大助かりです」
「既に嫌われているので、ちょっとくらい強引にしても上乘せされるだけなので、気にしませんか・・・」
「ちゃんとフォローしておきますよ」
「別にいいですよ」

まさか、ほんとうにやってくれるとは思わなかった。

ちよつとくらい強引つてのが引つかかるが、気にしてたら話が進みそうにないしな。

「ウチまでと言いましたが、さすがにそれもどうかと思いますので、その角まででいいですよ」

「そうですね。その方が助かります」

「とは言え、逃がしたくないので家まで付き合っ頂けると助かります」

「まあ、いいですけど・・・」

「じゃあ、角で隠れてますので・・・僕の名前を出すと警戒されるかも知れませんが、うまく誤魔化してくださいよ」

「警戒つて・・・何をしたんですか？」

「まあまあ・・・じゃ、お願いしますよ」

「・・・はいはい」

アルフが素直に孤児院の方へ・・・本当に行ってくれるとは・・・言ってみるモンだ。

うん。彼の中の人はいいい人だな。

しばらく時間を潰していると、アルフがミレイを連れて戻ってきた。さすがにうつむいてる。

いや。

昨日も、その前も、ミレイはうつむき加減だった気がする。

忌み人という枷が、前を向いて歩くということにも影響しているんだろうなあ。

「こんにちは。ミレイ」

「・・・え!?!」

「これでお役ご免ですかね」

「いやいや、もうちよつと付き合っ貰う約束でしたよね」

「はああ・・・もう、結構疲れたんですが」

「貸していいですから、お願いしますよ」

「・・・あの・・・どういうこと？」

「ああ、僕がお願いしてミレイを連れてきて貰ったんです」

「・・・なぜ？」

「ちょっと連れて行きたいところがありました。

おいやですか？」

「・・・う・・・えっと・・・」

アルフを警戒してるね。

まあ、それはしょうがないよね。

「大丈夫です。彼には何もさせません。

もし、彼がミレイをいじめるようなら、僕が全力で守ります。

だから安心してください」

「・・・う、うん」

「じゃあ、行きましょう」

うなずくやいなや、ミレイの手を取って歩き出した。

「アルフは、約束どおり、付いてきてくださいね」

「約束ですからね」

「じゃあ、ミレイ・・・ちょっと歩きますよ」

「・・・どっ、行くの？」

「本当は目隠ししたいくらい内緒です」

強引に手を引いて連れてきた。

うん。

実にワルモノです。

口では嫌と言いながら、あまり強い反応がないので、ついつい本当

に連れてきてしまった。

「ウィルは、やっぱりいいところのお坊ちゃんだったんですねえ」

アルフがしみじみと言う。

「いいこと言うほどですかね？」

「十分、いいことだと思いますよ」
「なるほど」

「世間知らずのお坊ちゃまですね」

「・・・なんか含みがありますね。」

まあ、いいです。アルフ、ありがとうございました」

「本当にこれでお役ご免なんですね」

「ウチにあがって、お茶でも飲んで行かれますか？」

「やめておきましょう」

「そうですか・・・さあ、ミレイ、到着です。家に入りますよ」

「え？」

「じゃあ、ウィル・・・私はこれで失礼しますよ」

「ええ、本当にありがとうございました」

「今日のごことは貸しにしておきますからね」

「お安くしておいてください」

「たっぷりと取り立てますよ」

「お手柔らかに」

「ははは、じゃ、また今度」

「ええ。また今度」

「ああ・・・じ、じゃあ・・・また今度」

「ミレイはまだダメですよ」

「ああ・・・」

「さあ、家にはいりましょう」

前庭を抜けて玄関へ。
そして玄関ホール。

「ただいま。母様、ミレイを連れてきました」

「あらあら。いらっしやい」

ミレイはおっかなびっくりで、僕の背中に隠れる。
なんとも・・・小動物ちつくで和む。

「まあまあ、可愛い。・・・美人さんね」

ふむ。

そうだよな。

将来は美人になりそうだ。
黒髪も綺麗だし。

「じゃあ、まずはお風呂に入りましょう」

「は？母様、お風呂ですか？」

「ええ、そうよ。」

可愛い子ですからね。

綺麗に磨き上げないと。

そうそう。ウィルはダメよ」

「も、もちろんですよ。何を言ってるんですか」

「あう・・・」

ミレイが拉致されていった。

ドナドナが聞こえてきそうだな。

ぽつぽつと1人残されてしまった。

えっと・・・リビングで待つかな。

来客の日（後書き）

T w i t t e r @ n e k o m i h o n p o

修正内容

引っかかりるが 引っかかるが

私の名前 僕の名前

来客の日のリリーレルマ(母親)(前書き)

虐待(を臭わせる)表現が出てきます。苦手な方は飛ばして下さい。

来客の日のリリーレルマ(母親)

「じゃあ、ミレイちゃん……一緒にお風呂に入りましょう」

「え……」

「さあさあ」

「あう……」

ちよつと強引だけれど、ミレイちゃんをお風呂に連れて行ったの。忌み人として虐げられてきた期間が長かったからか、すっかり引込み思案というか、人との接触を極端に嫌っているみたい。そんな性分に育ってしまったことが悲しかったわ。脱衣所で服を脱がすと、服の下からアザだらけの身体が現れたわ。

「これは……」

「あの……えっと……」

思わずミレイちゃんを抱きしめてしまったの。

こんな子に……酷い虐待をするなんて。

なんて酷い……こんな素直な子を守ってあげたい……誰がこんなことを……と言った諸々のことがぐちゃぐちゃとして……

「あう……ごめんなさい」

「え？どうして謝るの？」

「だって……こんな……だし。忌み人……だから」

「ううん。謝らなくていいの。」

むしろ、私たちが謝らなければいけないわ。ごめんなさいね。つらかったでしょう？」

「えう？……ううん」

「冷えてしまうわ。お風呂に入りましょう」

「・・・どうしても？」

「そうね。折角だから、どうしても」

「うわ・・・あつたかい・・・」

「そう。よかった」

二人してお風呂に浸かる。

残念ながら、身体のアザや火傷の跡はヒールでは治せなかったの。

まあ、そんな気はしていたのだけれど・・・あまりにも酷いので治してあげたかったわ。

若いから、そのうち目立たなくなるとは思うのだけれど。

「ねえ。ミレイちゃん」

「・・・はい」

「ウチの子にならない？」

「え！？・・・だめ」

「あら。だめなの？どうして？」

「だって・・・嫌われちゃう」

「嫌われちゃう？誰から？」

「みんなが・・・みんなから」

「大丈夫よ。誰もミレイちゃんを嫌ったりしないわ」

「ううん・・・外のみんなから」

「大丈夫よ。ウチの人が守ってくれるから」

「ううん・・・嫌われるの・・・だめ」

「そう。優しいのね」

本当、優しい子。

忌み人を家族として引き取ってしまったら、家族が世間から爪弾きになるって事を理解している。

なんて優しい子。
ぎゅっと抱きしめてしまったの。

「……ちよつと……苦しい」

「あらあら。ごめんなさい。」

ウチの子になるのがダメなら、ウチで働くのはどう？

これならミレイちゃんもそんなに困らないんじゃない？」

「え？……えつと……」

「そうね。ウチの子になつてしまうと、ウイルとの結婚で困りそうだし……身元の引き受けだけなら、家族ではないのだから、結婚で世間体を気にする必要も無いわね」

「え？……え？……あの……だめ」

「あら？ウチのウイルは嫌い？」

「……そんな……こと、ない……と思う」

「あらあら。じゃあ、問題は解決ね」

「え？……解決……してない」

「ウチで住み込みのメイドさんなんてどう？

きちんとお給金も出すし、家族には追々なればいいわ。

これならミレイちゃんも問題無いわよね」

「あう……困る……」

「あらあら。嫌なことは早めに解決しておかないとね。

何か嫌なことあるかしら？」

「えつと……忌み人だから……」

「ん……ミレイちゃんは忌み人じゃないわ。

これで問題は解決ね」

「え？」

「だって、ミレイちゃんはこんなにも良い子なんですもの。

忌み人なんかじゃないわ。

仕事のことは、ノイナからお聞きなさいな。

急がずに、ゆっくり憶えていけばいいから」

「あう・・・」

ちよつと強引すぎたかしら？

でもこれくらいしないと、この子は身を引いてしまいそうだし・・・
そういう部分は時間を掛けて解決していけばいいかしらね。

ゆくゆくはウィルのお嫁さんとして、家族になっていけばいいのだし。

「これから、よろしくね。ミレイちゃん」

「えう・・・」

来客の日のリリースママ(母親)(後書き)

Twitter @nekomihonpo

修正箇所

なるって子と なるって事(指摘感謝)

来客の日のミレイ（お客さん）

・・・ボクに泥を投げてた人・・・の仲間？の人が・・・ボクに用がある・・・って・・・怖い・・・から、付いていったら・・・昨日の子がいたの。

・・・どういうこと？・・・って思っていた・・・ら・・・連れられて・・・その子の家に着いたの。

帰ろうと・・・したら、ダメだって・・・忌み人なんか、家に・・・入れちゃ、ダメ・・・だよ？

おっきな・・・お家に入ったら・・・綺麗な人・・・

「あらあら。いらっしやい」

！？・・・ボクに、話しかけてきた・・・の？

「まあまあ、可愛い。・・・美人さんね。

じゃあ、まずはお風呂に入りましょう」

か、かわいい！？・・・美人！？・・・お風呂！？

お風呂・・・ボク？

忌み人なの・・・に！？

え？え？・・・どうして？

・・・ウィルの・・・お母さん・・・に、押されるように・・・連れて行かれたの。

・・・おかしい。

・・・おかしいよね。

・・・ボク・・・忌み人だよ？

おっきな・・・お風呂で・・・すく・・・暖かくて・・・ウィル

・・・なんで？
・・・解らない。

「そうね。ウチの子になってしまうと、ウィルとの結婚で困りそうだし・・・身元の引き受けだけなら、家族ではないのだから、結婚で世間体を気にする必要も無いわね」

け、結婚・・・!?

結婚・・・って・・・ボク・・・無理!

「え?・・・え?・・・あの・・・だめ」

「あら?ウチのウィルは嫌い?」

・・・え?え?

・・・えつと・・・よく解らない。

・・・けど・・・ウィルは・・・やさしい。

「・・・そんな・・・こと、ない・・・と思う」

「あらあら。じゃあ、問題は解決ね」

「え?・・・解決・・・してない」

「ウチで住み込みのメイドさんなんてどう?

きちんとお給金も出すし、

家族には追々なればいいわ。

これならミレイちゃんも問題無いわよね」

・・・忌み人だから・・・よく・・・ない。

「あう・・・困る・・・」

「あらあら。嫌なことは早めに解決しておかないとね。

何か嫌なことあるかしら?」

「えっと・・・忌み人だから・・・」

「ん〜・・・ミレイちゃんは忌み人じゃないわ。」

「これで問題は解決ね」

「え？」

「だって、ミレイちゃんはこんなにも良い子なんですもの。」

「忌み人なんかじゃないわ。」

「仕事のことは、ノイナからお聞きなさいな。」

「急がずに、ゆっくり憶えていけばいいから」

「や・・・話、通じてない・・・」

「あう・・・」

「これから、よろしくね。」

「ミレイちゃん」

「えう・・・」

お風呂・・・上がったら、真っ白なもこもこで・・・身体を拭かれたの。

「すっごい・・・柔らかくて・・・もこもこ。」

「ウィルの・・・お母さんが、拭いてくれた・・・の。」

「そしたら、別の・・・女の人が・・・服を着せて・・・くれたの。」

「・・・すべすべ・・・で、綺麗で・・・ボクの服じゃなくて・・・」

「でも、ボクにぴったり。」

「・・・あの・・・これ・・・」

「はい。リリー奥様から、メイド服を用意するように。このことでしたので、急ごしらえで申し訳ないのですが、ミレイさんに合っとう、仕立てました。」

「サイズに問題はありますか？」

「・・・そ、そうじゃなく・・・て・・・ボクの服・・・は？」

「ああ・・・元の服ですか。」

今、洗濯をしている最中ですので、これで我慢ください」

「・・・でも・・・ボク・・・忌み人」

「いいえ。今日からはランカスター家の使用人の一人だと伺っております」

「・・・あう」

・・・この人も・・・忌み人って・・・解ってくれない。

「ほら、ノイエ。ミレイちゃんが脅えちゃってるわ。」

いきなり口調が厳しいわよ。」

もつと優しく接しなさいな」

「そうですね。ちよつときつかつたかも知れませんが。」

しかしながら、曲がりなりにも、ランカスター家の使用人となるのですから、お客様対応という訳にもまいりません」

「そうですね。まあ、そんな厳しいことは追々でいいから、新しい家族が増えたと思って接してあげなさいな」

「そうですね」

「・・・忌み人だから・・・だめなの」

「いいえ。違いますよ。」

新しい家族です」

「そうですね。所で、お着替えは終わったかしら？」

「はい。奥様」

「どれどれ。まあ、ほんと可愛らしい」

・・・ぎゅって・・・抱きつかれたの。

「・・・あう」

来客の日のミレイ（お客さん）（後書き）

Twitter @nekomihonpo

ストックほとんど無いのに、反応があるとなじいじい嬉しくなって放出してしまっ病。

来客の日のその後

ガチャ。

どうやら、やっとお風呂が終わったようだ。

思った以上に長かったなあ。

と、リビングの扉の方へ顔を向けると・・・えっと・・・ミレイが母様の後ろに隠れてる。

ずいぶん仲良しになったなあ。

「ずいぶんと打ち解けたというか・・・なつかれてますね。母様」

「んふふ〜。さあ、ミレイちゃん。

お披露目ですよ〜」

「・・・あう」

メイドさんがいた。

ちっちゃいメイドさんがいた。

何がどうかよく解らないが、照れまくってるので、実にかわいらしいメイドさんがいた。

「えっと・・・母様？」

「んふふ〜。かわいいでしょ〜」

「ええ・・・それはかわいらしいのですが・・・何故にメイドさんなんですか？」

「・・・ごめんなさい」

「いえいえ。謝らないでください。

本当にかわいらしいですから」

「あう・・・」

「ミレイちゃんがね、家族になるのは嫌だっというのよ」

「ふむ・・・そうですか」

「でね。じゃあ、かわいらしいメイドさんにしましょう。って事にしたの」

「・・・えっと・・・そうですか」

「そうなのよ。かわいいでしょ？」

「・・・それは否定しませんが」

「そんな訳で、ウィル専属のメイドさんにしようかと思うのだけれど？」

「「え？」」

「あら？かわいらしいメイドさんは嫌い？」

「いえいえいえ。そういう問題じゃないですよね？」

ウチで引き取るって話だったじゃないですか。

なんでメイドさんなんですか」

「ランカスター家が後見人・・・後ろ盾になってミレイちゃんが1人でがんばれるように応援します」

母様・・・やる気があふれてるのはいいのですが、ガッツポーズはどうかと思えます。

「ミレイがそれでいいんなら・・・ミレイはそれでいい？」

「・・・なんで・・・」

「ん？」

「なんで・・・してくれるの？」

「たまたまです。」

たまたま・・・たまたま、ミレイが酷い状況にあるということに気がついてしまった。

偶然目にしたミレイの状況が、あまりにも酷く・・・手を差し伸べることで、自己満足・・・良心の呵責から逃れるため・・・結局、ミレイしか救われていないのに。

所詮、偽善で自己満足で・・・それでも、ミレイ1人でも・・・救うことが出来るのならいいかなって。

ミレイは・・・救われたと感じてくれるかな？

これは押しつけになってしまふのかな？」

「あう・・・ボク・・・忌み人で・・・きつと・・・みんなに迷惑・・・」

「そんな」「そんなことはないわ。ミレイちゃんは、こんなにもいい子なんだもの」

母様がミレイを抱きしめる。

母様・・・私の台詞の最中です。

いい所を持って行かれてしまった。

まあ、いいんですがね・・・。

「あう・・・うえ・・・うえええええ」

泣き出しちゃったよ。

どうするんですか母様。

泣き止むまで掛ける言葉も見つからず。

うわべだけの言葉ならどうともなりそうだったが、ここは泣きた
いだけ泣いた方がいいのかな？と・・・

「そういえば、身元の引き受けに関する手続きとかはいいんですか？」

「ウイル！」

「は、はい」

「そういう難しいことは大人に任せておけばいいの。

あなたはミレイちゃんを案内してあげなさい」

「は、はい。母様」

やりすぎた。

さじ加減が難しいね。

「じゃあ、ミレイ。改めてよろこべ」
「……うん」

来客の日のその後（後書き）

T w i t t e r @ n e k o m i h o n p o

修正箇所

家に来た日 来客の日

来客の日のその後のミレイ（家族？）

・・・なんか・・・頭ぐるぐるして・・・ウィルのお母さん・・・
付いていったけれど・・・
ガチャ

「ずいぶんと打ち解けたというか・・・なつかれてますね。母様」
「んふふ〜。さあ、ミレイちゃん。

お披露目ですよ〜」

「・・・あう」

・・・もう頭ぐるぐる・・・

「・・・何故にメイドさんなんですか？」

「・・・ごめんなさい」

「いえいえ。謝らないでください。

本当にかわいらしいですから」

「あう・・・」

・・・今日は・・・沢山、かわいいって・・・今日はどうしたんだ
ろうっ？

「ウィル専属のメイドさんにしようかと思っただけけど？」

「「え？」」

・・・え！？え！？

・・・えっと・・・専属の・・・メイドさん？

「あら？かわいらしいメイドさんは嫌い？」

・・・また。

・・・かわいらしい・・・沢山なの。

「・・・ミレイはそれでいい？」

「・・・なんで・・・」

「ん？」

「なんで・・・してくれるの？」

「たまたまです。」

たまたま・・・たまたま、ミレイが酷い状況にあるということに気がついてしまった。

偶然目にしたミレイの状況が、あまりにも酷く・・・手を差し伸べることで、自己満足・・・良心の呵責から逃れるため・・・結局、ミレイしか救われていないのに。

所詮、偽善で自己満足で・・・それでも、ミレイ1人でも・・・救うことが出来るのならないかなって。

ミレイは・・・救われたと感じてくれるかな？

これは押しつけになってしまふのかな？」

「あう・・・ボク・・・忌み人で・・・きつと・・・みんなに迷惑・・・」

「そんな」「そんなことはないわ。ミレイちゃんは、こんなにもいい子なんだもの」

ぎゅって・・・また、抱きしめられた・・・の・・・なんか・・・もう・・・頭、ぐるぐる・・・ぐちゃぐちゃで・・・

「あう・・・うえ・・・うええええ」

ボク・・・ボク・・・忌み人なのに・・・忌み人じゃない・・・って・・・こんなにも・・・優しく・・・暖かく・・・

「じゃあ、ミレイ。改めてよろしく」
「……うん」

……ボク……どうしたら……どうするの……忌み人なのに……

……暖かい食事……すごく……すごく……おいしかった。
……ふかふか……で……暖かいお布団……ボクが……こんな所で……寝ていいのかな？

つて……優しく……いいんだよ……って……すごく……すごく……気持ちよくて……夢……じゃなかった……ので……驚いたの。

……どうして……いいの……解らなかった……から……お部屋で……じっと……じっとしてたら……

コンコンッ

「！？」

コンコンッ

……どうしようー！？
……どうしたら……いい……の？

ガチャ

「ミレイ？……起きてる？」

ああ、なんだ起きてるんだね」

「……ごめんなさい」

「うん。謝らなくていいよ。」

おはよう

「・・・お、おはよう」

「朝食に行こうか・・・まずは、着替えてからだね。」

外に出ているから、着替え終わったら出ておいで

「え・・・あ・・・」

ボタン

えっと・・・朝食・・・って言った。

・・・いいの・・・かな？

そっだ！？

着替えが・・・遅かったら・・・怒られちゃう。

・・・急ごう。

・・・脱いだ服・・・どうしよう・・・えっと・・・持って行けば・

・・・いい・・・のかな？

ガチャ・・・キイ

「やあ、着替え終わったかい？」

「・・・うん」

「ああ、脱いだ服はベッドの上にも置いておけばいいよ」

「・・・あう・・・ごめんなさい」

「うん。謝らなくていいよ。大丈夫」

「・・・うん」

・・・待たせちゃ・・・悪い・・・から・・・急がない・・・と。

「「いただきます」

「・・・いただきます」

暖かくて・・・おいしい食事・・・
こんな・・・お日様みたいな所に・・・ボクがいていいの？
・・・忌み人なのに。

「・・・うえ・・・うええええ」

「ミレイ。ミレイ。どうしました？」

「・・・ぐす・・・ボク・・・ボク・・・がんばる・・・」

「え？」

「・・・がんばる・・・から・・・メイド・・・がんばる・・・か

ら・・・」

「あらあら。大丈夫よ。」

ゆっくり・・・ゆっくり慣れていきましようね」

「・・・ぐす・・・うん・・・がんばる・・・から」

ウィルのお母さんに・・・ぎゅっとされて・・・暖かくて・・・
涙が止まらなかったの。

来客の日のその後のミレイ（家族？）（後書き）

T w i t t e r @ n e k o m i h o n p o

修正箇所

家に来た日 来客の日

ミレイが歌った日

「もるで、のすにと、へんげるたい〜」

ミレイがウチに来てから、一悶着がありました。

思わず、遠い目をしてしまいますが・・・一悶着あった。

ウチではなく、世間的にだが。

ミレイの火傷跡と、母様が見た虐待の証に関して、父様が知った時・

・・・その時、ランカスター家に激震が走る！まさにそんな感じ。

父様と母様が暗躍（？）し、詳細は教えてくれないのだが、ウチの位がワンランクアップした。

どうも、あの孤児院・・・院長であるウラケス家が、虐待だけならまだしも、横領、人身売買、臓器売買と言った、ロクでもないことをして財をなしていたようなのだ。

国と地方行政からの資金横領・・・当然、脱税もだ。

売買だが、幼児愛好家（女兒だけじゃなくて男児も）、臓器偏愛者と言った変態の金持ちを相手に、売りさばいていたらしい。
ゲスすぎる。

ミレイは、忌み人なので買い手が付かなかったようだ。
ある意味、忌み人が幸いした。

「じおに、かんやか、いでいやし〜」

そんな事があったので、ウラケス家当主は逮捕。

ウラケス家は財産没収の上、首都、及び、首都衛星都市からの追放
国外追放じゃないだけマシだが、財産没収されているので、どうにもならないんじゃないかなあ？

詰んでるよね。

で、我が家は・・・と言うと、孤児院の管理運営を言いつけられ、孤児院職員の任命権、資金運営の許可、該当する土地の整備運営・・・と言った厄介事にしか思えない内容を仰せつかった。でだ・・・任命権、運営権あたりで、家督が足りないんじゃないか？って話になって、ワンランクアップに繋がった訳だ。

「とりと、ふういき、かすもい〜ど〜」

孤児院の運営に関しては、父様と母様が厳選した職員により運営されていくことになった。

元々、あまり贅沢をする家風ではないので、増えた家禄がまるまるっと孤児院の運営に回されている。

孤児院の建物も、あのボロ屋敷ではなく・・・接收したウラケス家を使っている。

一気に立派になって、喜ばれているようだ。

ま、ウチがあの家使うこともないしな。

有効活用ってモンだ。

ミレイは、1度だけ孤児院を見に行ったが、孤児院には戻らなかった。

まあ、忌み人として、迫害されてた所に、好きこのんで戻りたいとは思わないよな。

「てとら、かりこり、し〜りむまい〜」

ミレイは・・・と言うと、まだまだ子供ということもあり、1日3刻（3時間半）程度の仕事を、ノイナに付き従っ・・・

「あら。ウィル、ご機嫌ね？」

「母様。ご機嫌という訳ではないのですが・・・ご機嫌ですか？」

「そうよ。何か知らない歌を歌ってたじゃない」

「ああ・・・あれですか。なんででしょうね？」

「あらあら。どこで覚えてきたのかしら？」

「ミレイが・・・たまに歌ってるんですよ」

「あら？ミレイちゃんか？」

それは是非とも聞いてみたいわね」

「掃除中とか・・・気分が乗ってる時に歌っていますよ」

「だいぶ、慣れたのかしらね？」

「そうですね。まだまだ・・・だとは思いますが・・・」

自分が忌み人つてことをかなり気にしているというか・・・」

「そうね。忌み人では無いと思うのだけれど・・・」

「忌み人なのに忌み人じゃないつてことですか？」

そもそも忌み人つて何ですか？」

母様は、いじめられている人としてしか仰りませんでした」

「そうね。これから一緒に生活していくのだもの。」

ウィルには知っておいて貰った方がいいかも知れないわね」

「教えていただけるのなら、教えて下さい。」

ミレイを守る為にも・・・正しい知識が必要なんです」

「クロ・・・闇の眷属と呼ばれる者達がいるのは知っているかしら？」

「？」

「ええ。父様に教えていただきました。」

動く死体や吸血を行う者達だと・・・」

「そう。彼らは、その人との違いから、恐れられ、忌み嫌われているわ。」

彼らも人を食べ物や虫けら程度にしか思っていないみたいだし。」

そして、彼らは、時として食料以外の目的で人を襲ったりするの」

襲つて・・・犯すつてことだよなあ。

つまり・・・忌み人とは、闇の眷属との混血・・・と言うことが。

ミレイはハーフつてことなのか？」

「？」

「？」

孤児院に居たのに？

母親が混血だということを言いふらしたんだろっか？

・・・それは無いな。

自分が闇の眷属に傷物にされたと喧伝するようなモンだし。

っていうか・・・子供が生殖行動に関する知識を持つてるのって・・・

・極々一般的な常識なのか？

「襲われた結果、身籠もってしまうことがあるわ」

課程を駆け抜けたな。

まあ、詳細に説明されても・・・なんとなく気まずいし・・・適度にスルーだ。

・・・ただし、子供らしさを忘れずに！程度に。

「みごもる・・・ですか」

「ああ・・・そうね。えっと・・・子供が出来てしまうことよ」

「つまり・・・その子供が忌み人？」

「そうね。その子は忌み人と呼ばれ、差別されるわ」

そうになると、やはり、母親が喧伝しないとバレないと思うんだが・・・

・・・何か身体的な特徴が出るのか？

「その子には、何か特徴が出るんですか？

例えば、ツノが生えてくるとか・・・」

「そうね。そういう子もいるわ。

目が光ったり、背中に羽があったり・・・」

「じゃあ、ミレイも!？」

「いいえ。ミレイちゃんには、そういった特徴は見られなかったわね」

ほっ。

外見的特長が無いのは良かった。

じゃあ、何をもってして、忌み人と言っているんだろうか？

血を好む・・・様には見えないしなあ。

要するに・・・吸血鬼ってことだろ？

犬歯が鋭かったりしてないし・・・

・・・こつちの世界の吸血鬼知らないけど。

「じゃあ、ミレイは忌み人ではない？」

「見た目では解らない場合もあるわ。」

こればかりは、ミレイちゃんに聞いてみるか、しばらく様子を見るしかないわね」

「母様は、どう考えているのですか？」

「そうね・・・実は見た目だけなんじゃないかしら？」

「は？」

「ほら、ミレイちゃんって、綺麗な黒髪してるでしょ」

「ええ・・・日の光でうつすらと蒼味があった感じになりますが・・・綺麗ですよ」

「そうね・・・ウィルは町中で黒髪の人って見たことあるかしら？」

「え？・・・さすがに黒髪くらいいるんじゃないですか？」

「いいえ。居ないわ。」

「少なくとも、私は見たことが無いの」

「え？」

「闇の眷属に黒髪の者が居て、黒髪の間人は、その子供と思われているわ」

「え？じゃ、じゃあ、ミレイは、髪の毛が黒いというだけで、忌み人と差別され、虐待を受けていたと言うのですか？」

「私はそう思うの」

馬鹿な！そんな・・・そんなくだらない事で・・・

「じゃ、じゃあ、今までも、そんな見た目がちよつと違うだけで差別され、謂れの無い迫害・・・下手をすれば、そんな理由で殺されてしまった人たちが居たかも知れないと！？」

「ええ・・・悲しいけど、そうなるわね。

本当の忌み人・・・と呼ばれる人たちも居ることは間違いないのよ」

なんだそれ！なんだそれ！

「なんだそれ！アホかッ！

髪の毛が黒いだけ？

アホかッ！

突然変異かも知れないじゃないか。

伴性遺伝で黒髪が発現した可能性だってあるじゃないか。

先祖帰りはどうだ？あれは隔世遺伝だったか？

十分に可能性があるじゃないか！？」

「ウイル・・・」

母様にそつと抱きしめられた。

母様の暖かさが・・・急速に頭を冷やす。

・・・暴走しすぎたか。

というか、考えが表に出た？

・・・ドン引き！？

「母様・・・？」

「そうね。髪の毛が黒いだけで、ミレイにあんなことをするなんて・・・良くないわよね。」

だからね・・・これからはウイルが守ってあげないとね
「母様・・・」

3分だったのか・・・5分だったのか・・・
そつと抱きしめられたまま時間が過ぎた。

「それにしても不思議な歌ね」

「え？・・・ああ、ミレイの歌ですか・・・」

一気に話の方向を捻じ曲げてきたな。

「不思議ですか？」

「そうね。専門外だから、あまり解らないのだけれど・・・

呪印魔法の呪文に近い感じかしら」

「呪文ですか？」

「そうよ。本物の呪文に比べると、ものすごく短いのだけれど・・・

言葉の感じは呪印魔法に近いわね」

「ふむ」

呪印魔法の才能持ちですかね？

どうやって確認したモンですかね。

取り敢えず、母様との会話は打ち切り。

気分転換に日課のヒールをこなすとしてしよう。

さあ、ミレイはどこだ？

2階から音が聞こえるな。

ガチャ

「ミレイ」。そろそろ出かけますよ?」
「……ん」

こくりと頷くと、とてととと歩いてノイエの方へ。

「ノイエ……ウイルと外……えつと……散歩してくる。
……いい?」

「そうですね。」

本日の作業も終わりましたし、出かけてきていいですよ。
気をつけて行ってらっしゃい」

「……うん」

とてととと戻ってきて

「ウイル……行く」

なんとも小動物ちっくで和むねえ。

「じゃあ、ノイエ。行ってきます」

「はい。お気を付けて行ってらっしゃいませ」

散歩……と言うか、日課のヒールだ。

前は色々心配を掛けていたみたいだが、ミレイが来てから、一緒
に出かけるということ、一応安心されているみたいだ。

お目付役って所ですかね?。

ま、忌み人ってことで、極力、町中は避けている。

なんせ、ミレイのお陰で、隠れて出て行かなくて済む。
出かけるのは楽になった。

取り敢えず、いつもの枯れ森に到着。

目印の毛糸まで移動して・・・隣の木にリサーチ、リコンディション、ヒールのコンボを喰らわす。

最近では面倒になって、範囲ヒールの練習に切り替えてる・・・そうでもないかとMPが枯渇状態にならない。

素直にヒールで枯渇を狙うと面倒なんだよね。

効率よく枯渇させないと・・・ちよつと増やしすぎたか？

「ミレイ。ミレイは魔法が使えるんですか？」

どストレートに聞いてみた。

どうやって確認するか思いつきませんでしたっ！

「・・・ん？・・・ウィル・・・何を言っているの？」

「ほら。よく、歌ってるじゃないですか。

もるで、のすにと、へんげるといゝ・・・って

「ッ！？・・・なんで・・・知ってるの！？」

「え？いや・・・掃除の時とか歌ってますよ？」

「う！！？・・・そ、そんなこと・・・ないの！？」

ここまで慌てるミレイというのも・・・斬新だな。

えっと・・・知られちゃいけなかったのか・・・恥ずかしかったのか・・・後者のようだが・・・

「じゃあ、まあ、歌っていませんでした」

「うん・・・うん」

「で、母様が言うには、呪印魔法みたいだ・・・とのことなのです
が」

「じゅいんまほう？」

「ええ。何やら呪文に似ているそうです」

「・・・そっなの？」

「誰から習ったんです?」

「……えつと……適當?」

「適當ですか……ミレイがなんとなく気分で歌っていると」

「……なんだろうね?」

「いや……そう言われても困ってしまうのですが」

ふむ。どうやら思いつきのようだ。

母様が呪文っぽいつて言っていたから、てっきり、ミレイが呪印魔法を使える物と勘違いしたのだが……

「ウイル……今日のヒール……終わった?」

「ええ。今日はこの辺で帰りましょうか」

「……うん」

ミレイが歌った日（後書き）

Twitter @nekomihonpo

修正箇所

街中 町中

増えた家督 増えた家禄（指摘感謝）

補足、あるいは言い訳

臓器売買に関してですが、ゲスさ具合を示す為にひねり出したモノです。

移植とかは考えておらず、主に鑑賞目的です。

ロウや蜜蝋なんかで固めているとお考え下さい。

ストーキングされた日

季節も巡り、6歳になった。

ミレイも、我が家にだいぶ馴染んだんじゃないか？と思うのだが・

母様に振り回されている感じた。

まあ、何かと遠慮するので、母様が気を使って積極的に動いているためだ。

お陰で、だいぶ笑顔が増えた気がする。

・・・苦笑も増えた気がするが・・・気のせいだな。

日々の日課のヒールは、今も続けている。

木の本数は・・・いい加減数えてられない。

1500は超えていると思うのだが・・・

範囲ヒールの練習を始めたあたりから、本数がいい加減になった。

まあ、仕方ない。

でだ。

ここ数日、大物に取り組んでいる。

枯れ森の中心(?)にある大木だ。

直径15メートルはあるんじゃないか？という大物だ。

・・・子供目線なので、実際はそこまで無いのかも知れないが。

で・・・ここ数日掛かってる理由なんだが・・・

とにかく根が多い・・・それに深い。

リサーチして、リコンディションするのだが、

一回のリコンディションじゃ1、2箇所が精一杯だ。

そんな訳で、地味にリコンディションをして回るといふ作業を繰り返している。

「異常を取り除くことを願う。リコンディション」

恐らく、最後の異常部位のリコンディションが終わる。

「ウィル・・・終わったの？」

「ああ。たぶんですけどね。」

念のため、一周して確認ですね」

「・・・解った」

ぐるっと一周。

リサーチ結果に不審な点は見えない。

「さて・・・こんだけの大木です。」

一発、でかいのをぶちかましますか」

「我、彼の者を、我の持てる最大の力で癒すことを願いたてまつらん。マックスヒール！」

マックス・・・要らない気もするが・・・

・・・っていうか・・・『だせえ』

パツと思いつかなかったんだ。

しょうがないじゃないか。

後々、短縮詠唱する際に、分かり易い語彙にしておかないとバランス調整が出来ないんだよね。

なんでか知らないけど。

それはそれ。

さすがに最大MPを突っ込んだヒールだけはある。

力の抜け方が半端ない。

立ってるのも億劫なので、その場に座り込む。

「ウイル！」

「ああ・・・ちょっと休めば、大丈夫です」

「・・・なら・・・いい」

これで、この大木も生い茂るかな。

さすがに、この大木が復活したら、町の人々も枯れ森が復活したの
気がつきますよね。

ま、すでに何人かは気づいてるけど。

どんだけ鈍いんだよ！

とか思ったけど・・・

それだけ、枯れ森が枯れているのは当たり前ってことだったんだろ
うなあ。

「・・・ウイル！」

「ん？どうしました、ミレイ？」

「後ろ」

「・・・後ろですか」

振り返ると見知らぬフード姿の人が。

・・・女性・・・ですかね？

「やあ、こんにちは」

「はあ？こんにちは」

ミレイがこそこそと私の背中に隠れる。

まあ、人見知りだから仕方が無い。

っていうか、私も隠れたい。

なんとなく苦手な感じっばい。

「ここは、コトナリリスの枯れた森だったと思うのだけれど・・・

間違いないかな？」

「えっと・・・枯れ森としか知らないのです」

「そっか。君たちは枯れ森と呼んでいるんだっただね。

ああ、そんなに警戒しないでくれたまえ。

怪しい者じゃないよ」

「はあ」

「私の名前はハルトティータ。ハルトティータ・トウ・アイサノシ。枯れ森が復活したという噂を聞いてね。

調べに来てたんだ」

「そうですね・・・それじゃあ、僕たちはこれ」「君の行いだね」

だね・・・ってバレてるじゃないか。

どうしたモンだろうか。

うくん。剣呑な雰囲気ではないようだが・・・

ばっくれ方向でひとつ・・・

「えっと・・・僕たちは子供ですよ？」

「そうだね。子供だね」

ばっくれ失敗の香り。

「子供に森を復活させるなんて無理だと思っんですが・・・」

「そう。私たちは無理だと思っていた。

どうにもならないので森を見捨てた。

森は主であるコトナリリスの大樹も含め、枯れてしまった。

私たちは森の恵みも祝福も護りも・・・失い、見捨てて・・・逃げたんだ」

「・・・仕方なかったんじゃないですか？」

「そんなことは無い！」

現に森は生きていた。

生きていたのに、その声に耳を貸さずに人の所為にして逃げただよ

「人の所為ですか・・・」

「ところが間違っていた。」

私たちの判断は間違っていたんだ。

人間の子よ」

「は、はい」

「一族に成り代わり、感謝を・・・」

最大限の感謝をささげたいと思う」

バレてる上に、大げさな話になりはじめた。
なんだろう。

逃げた方がいいとしか思えない熱の帯びようなんだけど。

「い、いえ・・・僕たちは別に・・・」

「隠さなくてもいい。」

ここ数日、君たちが森を巡り、コトナリリスの大樹の病を治し・・・
そして今日・・・

君の持てる力の限りで癒しを施してくれたことは解っている」

完全にバレてる・・・

っていうか、ここ数日って何だ？

どういうことだ？

「そ、それで・・・ハルトティータさん？は僕たちに何を？」

「いや。あまりにも感動したので、最大限の賛辞と・・・何かお礼
が出来ないかと・・・」

「い、いえ・・・僕たちが勝手にしたことですし・・・」

それに、コトナリリス・・・でしたっけ？大樹も復活したかは怪
しいですし・・・」

「ああ、それなら大丈夫だろう。」

コトナリリスの大樹に生命の息吹を感じるからね」

「生命の息吹ですか・・・」

「ああ・・・君たちは知らないのか。」

エルフの中でも、一部の変わり種連中は、森の息吹を感じ取ることが出来るんだよ」

「エルフの方だったんですね」

「ああ、フードをしたままだったね。」

これは失礼をした」

へえ。本当にエルフっているんだね。」

それに綺麗な人だね。」

やっぱり長寿なのかな？長寿なんだろうなあ。」

それはそれ。」

町中じゃ見かけないけど・・・隠れてるのかな？

隠れてるといふよりは、人里離れて住んでるのかな？

森の中で閉鎖的に・・・みたいな感じで。」

「エルフは珍しいかな」

「そうですね・・・町中じゃ見かけたことが無い気がします」

「そうだろうね。」

この森が枯れたときに、別の森へ移住してしまっただからね」

「ああ・・・さっきの人の所為にしてっつてのは、人間の所為にしてっつてことですか？」

「そうだね。」

君は聡い子だね。」

人並み外れたヒールといい・・・

本当に不思議な子だ」

「えっと・・・僕たちが枯れ森にヒールをしていたことは黙っていで欲しいのですが？」

「え？ そうなのかい？

せつかく、ここまで復活したのだから、大々的に触れ回ったほうがいいんじゃないかい？」

「枯れ森が復活したことに關してではなく・・・僕たちがヒールをしていたということですよ」

「ふむ。それでは誰からも感謝されないよ？」

「感謝して欲しくてやった訳じゃありませんから」

「それじゃあ、ちよつと寂しいね。」

・・・そうだ。これを持っててくれないか？」

ハルトティータが右耳のイヤリングを取り外す。

黄緑色をした石で出来ている。

きらきらと淡い緑がとても綺麗だ。

小指の第一関節くらいはありそうなんだけど・・・

・・・高いよね？

「そんな・・・受け取れません」

「そう言わずに持つていてくれたまえ。」

そうだな。

君に預ける・・・という形ではどうかな？」

「預ける・・・ですか？」

「そう。君に預けるんだ。」

もう片方は私が持ち続けるし・・・

君が、もし死んでしまったのなら、その石は返してもらおう」

「そんな事が解るんですか？」

「ああ・・・これでもティータの祝福という名前持ちのイヤリングだからね」

「ハルトティータさんの名前の一部ですね」

「ああ、そうさ。私の名前の一部を持つているんだ。」

つまり、私の片割れとも言える」

「えっと・・・じゃあ、預かるだけ預かるということ・・・
もしかしたら、ずいっと死なないかも知れませんか？」

「ははっ、それなら大丈夫だ。」

「ハイエルフって奴は、案外しぶといからね」

「ハイエルフだったんですか？」

「そうだよ」

「いやあ、ほんとにいるんだ。」

「ハイエルフ。」

「物語の中だけじゃないんだなあ。」

「まあ、魔法のある世界に居てなんだけど。」

「やっぱ、エルフの上位種族なのかな？」

「エルフより偉いんですか？」

「はははっ、年寄りになれるだけさ」

「そうですか・・・」

「えっと・・・名乗りがまだでしたね。」

「僕の名前は、ウイル。ウイル・ランカスター。」

「こっちの隠れてるのはミレイ。」

「ランカスター家の長子として、ハルトティータさんのイヤリング、

「丁重にお預かりいたします」

「ああ、そうか。君の名前を聞いていなかったのか。」

「・・・ウイル。」

「よろしく頼むよ。」

「そんな石でも貴重なんだ」

「はい。ハルトティータさんに無事にお返しすることをお約束いたします」

「じゃあ、私はもう少し森を散策してみるとするよ」

「はい。僕たちはもう帰ります」

ハルトティータと別れる。
なんだろう・・・妙に緊張した。

「ウイル・・・お疲れ?」

「なんででしょうね。何か、妙に疲れました」

「きっと・・・ヒールの所為」

「そうですね?」

ミレイはハルトティータをどう思いましたか?」

「んと・・・おつきな人?」

「おつきな人ですか・・・」

「リリー奥様・・・みたいに優しい人」

「ふむ・・・悪い人では無さそうですね。」

まあ、それはそれ。

このイヤリング・・・どうしたモンですかね。

僕がイヤリングをするつてのも似合わないでしょうし」

「そんなことない・・・と思う」

「そうですね?ありがとうございます。」

うん・・・鎖にでも付けてネックレスにしますかね」

「じゃあ、今日は・・・もう帰る?」

「そうですね。帰りましょう。」

ほんと、なんでか疲れましたし」

「解った・・・帰る」

ストーキングされた日（後書き）

Twitter @nekomihonpo

修正箇所

一部も 一部の（指摘感謝）

君が復活してくれたんだね 君の行いだね（指摘感謝）

ストーキングされた日のハルトティータ（フードの人）

ある日、いつものように面白くもなんともない会議に出ていたら、気になる報告があった。

アルバ・イデナ・コトナのコトナリリスの枯れた森が息を吹き返しつつあるという。

そんな馬鹿な。

一蹴するのは容易い。

だが、事実だとしたら、何が森を復活させたのか確かめねばなるまい。

エルベウルの森でも、木が死に始めていると聞く。

コトナリリスの枯れた森での手当てが有効な手段なら、エルベウルの森でも有効なはずだ。

馬鹿正直に、「私が視察に行く」とでも言おうものなら、猛反対を受ける。

そう・・・馬鹿正直に言えば・・・だ。

そんな訳で、数日前から、木の”うる”に旅の装備一式を隠しておいた。

散歩に行くと呼び出して出かけたついでに、回収し、そのままコトナリリスの枯れた森へ向かった。

なるほど。

確かに蘇りつつあるようだ。

しかし、不思議なことに、森の周囲は枯れたままだ。

中に入ると青々と茂っている。

私たちが見捨ててしまった・・・コトナリリスの森の息吹だ。

希望を胸に、コトナリリスの大樹の場所へ向かった。

ここまで蘇っていたのだ。

大樹も蘇っているに違いない。

と、勝手に、はやってしまった。

さすがに勝手すぎた。

大樹は、私が最後に目にした時と、なんら変わらず、枯れたままだった。

ガサツ・・・ガサツ・・・

野生動物か？

咄嗟に身を隠す。

・・・子供だったか。

こんな所まで何をしに？

「ウィル・・・今日はこの大木？」

「ええ。そろそろ、こいつをやっつけようかと」

やっつける？

どういうことだ。

いくら枯れたとは言え、コトナリリスの大樹だぞ。

「まずはと・・・不調を知りたいを願う。リサーチ」

「・・・どう？」

「これは・・・やっかいですね。」

木がでかすぎです・・・異常を取り除くことを願う。リコンディ
ション」

「・・・治った？」

「一回じゃだめですね。」

と、言うか、全然だめですね。

これは・・・面倒くさそうです」

大樹に対して、神聖魔法を使っているのか？

あの子らは神徒なのか？

「うん・・・取り敢えず、ヒールをして活性化だけしておきますかね。」

「ヒール！つと」

今は・・・ヒール！？

ほとんど無詠唱じゃないか。

本当に子供なのか？

小人族の大人なのではないのか？

「やはり、何回かに分けないとだめですね。」

治し終わりません」

「じゃあ・・・今日はもう帰る？」

「そうですね。」

あと2回くらいはやらないとダメそうです」

子供たちが帰っていく。

途中まで追いかけたが、町の中に入っていったので、そこまでとした。

あの様子からして、あの子・・・ヒールをしていた子が、この森を蘇らせたのか？

ざっと散策しただけでも、かなりの範囲、蘇っている。

翌日、またあの子供たちがやってきた。

前日と同じようにコトナリリスの大樹に呪文を唱えていく。ほぼ一周したかと思うのだが、力尽きたのか、同じように帰っていく。

やはり、あの子が森を蘇らせたと思えない。

無詠唱のヒール、作業の手際を見るに、かなりの上級神徒なのか？ あの子は、私たち一族が、手も足も出ず、ただただ枯れていく様を見守るしかなかった森の病を治せるというのか？

どうやっても止められなかった崩壊を・・・神聖魔法で止められたというのか。

あの時に、解っていれば・・・

・・・今度会つたら、あの子に声を掛けよう。

そして、私たち・・・いや、私が感謝している気持ちを伝えよう。

今度・・・と言わず、翌日も子供たちはやってきた。

コトナリリスの大樹の様子を見回った後、その子の持てる力の全てを注ぎ込んだヒールを唱えた。

端から見ていても、その凄さに驚愕してしまう。間違いない。

彼が・・・この枯れ果てた森を蘇らせたのだ。

「やあ、こんにちは」

「はあ？ こんにちは」

声を掛けてみると・・・警戒された。

おかしいな。

友好的なハズなんだが・・・何がいけなかったのか。

「ここは、コトナリリスの枯れた森だったと思うのだけれど・・・間違いないかな？」

「えっと・・・枯れ森としか知らないのです」

「そつか。君たちは枯れ森と呼んでいるんだつたね。

ああ、そんなに警戒しないでくれたまえ。

怪しい者じゃないよ」

「はあ」

「私の名前はハルトティータ。ハルトティータ・トウ・アイサノシ。枯れ森が復活したという噂を聞いてね。

調べに来てたんだ」

「そうですか・・・それじゃあ、僕たちはこれ」「君の行いだね」

会話を打ち切って、逃げようという意志が感じられたので、遮ってみた。

決して意地悪をしたかった訳じゃない。

本当だよ。

「えっと・・・僕たちは子供ですよ？」

「そうだね。子供だね」

そして、子供には似つかわしくないヒールの使い手だ。

それとも、今の子供はそんなモノなのかな？

「子供に森を復活させるなんて無理だと思っんですが・・・」

「そう。私たちは無理だと思っていた。

どうにもならないので森を見捨てた。

森は主であるコトナリリスの大樹も含め、枯れてしまった。

私たちは森の恵みも祝福も護りも・・・失い、見捨てて・・・逃げたんだ」

それこそ、森の住人としての矜恃も、人間という隣人も投げ捨てて・

・

「・・・仕方なかったんじゃないですか？」

「そんなことは無い！」

現に森は生きていた。

生きていたのに、その声に耳を貸さずに人の所為にして逃げただよ

「人の所為ですか・・・」

「ところが間違っていた。

私たちの判断は間違っていたんだ。

人間の子よ」

「は、はい」

「一族に成り代わり、感謝を・・・

最大限の感謝をささげたいと思う」

「い、いえ・・・僕たちは別に・・・」

「隠さなくてもいい。

ここ数日、君たちが森を巡り、コトナリリスの大樹の病を治し・・・そして今日・・・

君の持てる力の限りで癒しを施してくれたことは解っている」

「そ、それで・・・ハルトテイータさん？は僕たちに何を？」

「いや。あまりにも感動したので、最大限の賛辞と・・・」

む？そうだな・・・賛辞を贈るのはいいとして・・・それでは彼らに何も為していないな。

「何かお礼が出来ないかと・・・」

「い、いえ・・・僕たちが勝手にしたことですし・・・

それに、コトナリリス・・・でしたっけ？大樹も復活したかは怪しいですし・・・」

「ああ、それなら大丈夫だろう。

コトナリリスの大樹に生命の息吹を感じるからね」

「生命の息吹ですか・・・」

「ああ・・・君たちは知らないのか。」

エルフの中でも、一部の変わり種連中は、森の息吹を感じ取ることが出来るんだよ」

「エルフの方だったんですね」

「ああ、フードをしたままだったね。」

「これは失礼をした」

「エルフは珍しいかな」

「そうですね・・・町中じゃ見かけたことが無い気がします」

エルフが珍しいという。

まあ、それもそうか。

この森が枯れたときに、別の森へ移住してしまったからね」
町中にエルフが居る訳もない。

「そうだろうね。」

この森が枯れたときに、別の森へ移住してしまったからね」

「ああ・・・さっきの人の所為にしてっつてのは、人間の所為にしてっつてことですか？」

「そうだね。」

君は聡い子だね。

人並み外れたヒールといい・・・

本当に不思議な子だ」

この歳にして、既に賢者と言うことが。

人とは、真に不可思議で・・・面白い。

「えっと・・・僕たちが枯れ森にヒールをしていたことは黙って欲しいのですが？」

「え？そうなのかい？」

せっかく、ここまで復活したのだから、大々的に触れ回ったほう

「がいいんじゃないかい？」

「枯れ森が復活したことに關してではなく……僕たちがヒールをしていたということです」

自分の成果を大々的に喧伝しないってのはどういう意図だろうか？
子供の身で、こんなことをしでかしたのだ。
それこそ、国を挙げて祝つてもいいくらいだ。

「ふむ。それでは誰からも感謝されないよ？」

「感謝して欲しくてやった訳じゃありませんから」

「それじゃあ、ちよつと寂しいね」

無欲とは言え、報酬があつてしかるべきだ。

私たち……いや、私の気が済まない。

彼らには何らかのお礼をしなければ。

「そつだ。これを持っててくれないか？」

右耳のイヤリングを取り外す。

コレならば、これからの人生に恩恵があるはずだ。

「そんな……受け取れません」

「そつ言わずに持つていてくれたまえ。

そつだな。

君に預ける……という形ではどうかな？」

「預ける……ですか？」

「そつ。君に預けるんだ。

もう片方は私が持ち続けるし……

君が、もし死んでしまったのなら、その石は返してもらつ

「そんな事が解るんですか？」

「ああ・・・これでもティータの祝福という名前持ちのイヤリングだからね」

「ハルトティータさんの名前の一部ですね」

「ああ、そうさ。私の名前の一部を持っているんだ。」

つまり、私の片割れとも言える」

「えっと・・・じゃあ、預かるだけ預かるということ・・・」

もしかしたら、ずいっと死なないかも知れませんか？」

「ははっ、それなら大丈夫だ。」

ハイエルフって奴は、案外しぶといからね」

「ハイエルフだったんですか？」

「そうだよ」

「エルフより偉いんですか？」

「はははっ、年寄りになれるだけさ」

「そうですか・・・」

えっと・・・名乗りがまだでしたね。

僕の名前は、ウイル。ウイル・ランカスター。

こっちの隠れてるのはミレイ。

ランカスター家の長子として、ハルトティータさんのイヤリング、

丁重にお預かりいたします」

おっと。そうか・・・名前も知らないままだったな。

こちらにも失念していたし・・・ウイルも警戒していたのかな？

「ああ、そうか。君の名前を聞いていなかったのか。」

・・・ウイル。

よろしく頼むよ。

そんな石でも貴重なんだ」

「はい。ハルトティータさんに無事にお返しすることをお約束いたします」

「じゃあ、私はもう少し森を散策してみるとするよ」

「はい。僕たちはもう帰ります」

そうして、彼らと別れた。

本当に、あの枯れ果てた森は無くなったのだな。

2日もすると、コトナリリスの大樹が芽吹いていた。

あの枯れ果てた大樹に・・・新しい芽が・・・知らず知らずに泣いていた。

こんな感動的なことは、長い一生のうち、何度あるだろうか？

これは、もう・・・大事件だ。

急いで帰って、一族に伝えなければなるまい。

「じいや、喜べ！コトナリリスの」「一体、今まで、どこに行っていたのじゃッ！」

頭ごなしに怒鳴られた。

「そんなに怒鳴らなくても聞こえてるよ」

「しかしですな・・・お遊びが過ぎますぞ！」

「コトナリリスの森が蘇ってきているとの報告は聞いているだろう？」

「ああ・・・あの与太話ですか・・・」

あんな与太話を信じるなぞ・・・

時間の無駄ですな

「そうでもない。」

実際、蘇っているし、コトナリリスの大樹に新しい芽が出ていた

「な、な、な、なんですと!？」

「・・・怒鳴らなくても聞こえてるよ」

「そんな馬鹿な事がありますかッ！」

「じいやは、私が見たことを信じられないと言つのか？」

「ぐ……いや、しかし……」

あの枯れた森が蘇るなぞ……

どんな奇跡が……」

「ああ、確かに奇跡だった。」

あれは賢者だな」

「賢者ですと!？」

「ああ、彼が、原因を治し、ヒールで治療して回っていたのだ」

「ヒ、ヒールですと!？」

「ああ、彼は凄かった。」

あそこまでヒールが使える人となると、そうは居ないのではない
か」

「人……人間が森を蘇らせたと!」

「うむ。そういう事だ」

「ぐ……人がそのような……」

……又ツ!？」

ハ、ハルト様ツ!

イヤリングが片方無くなっておりますぞツ!！」

「ああ……いいんだ。」

これは彼にあげて」「なんですとツ!？」

「いや……預けてきたんだ」

「あ、あ、あ、預けてですと!？」

「いいじゃないか。」

もう片方があれば、居場所は解るのだし……」

「そういう問題ではありませんツ!

あのイヤリングは、清らかでなければならぬのですツ!

それを、人間ごときなどに!」

「じいやは、そう言うが……コトナリリスの大樹を蘇らせてくれ
た恩人だぞ」

「ぐ……しかしですな……」

「私の決断に反対なのか？」

「ぐ……ぐぬ……しかし……イヤリングを」

「コトナリリスの大樹を蘇らせてくれた恩人に、せめてものお礼がしたかったのだ」

「ぐ……確かに……それは、そうなのですが……」

と、取り敢えず、急いで関係各所に連絡いたしますじゃ」

「ああ……そうだったことは任せる」

じいやが慌ただしく立ち去る。

ふう……実に疲れるご老人だ。

「ハルト様……声が漏れております」

「ん？……それはまずいね」

「しかし、よろしかったのですか？」

イヤリングを人間に預けるなどと……」

「まあ、あんなイヤリングでも、私との親交の証として役に立つだろう？」

これから彼が人生で出会うエルフに、よくして貰えるぞ？

これでも威厳だけはあるからな」

「老い先短い人生で、どれだけ恩恵があるのかは疑問ですが……」

「ん？まあ、確かに人間だから老い先は短いかも知れないが……」

「……どうも話が食い違っている感じがしますね」

「そうかい？」

「ご老人なんですよね？」

「いや？子供だよ」

「こ、子供ですか！？」

賢者だというので……てっきり老人かと。

それはそれで驚きなのですが」

「いや。子供だったよ。」

そうだね……人間の歳はよく解らないが……

学園に通う前くらいじゃないかな？」

「それは・・・また・・・子供ですね」

「そうだろうか？」

「で、賢者である？」

「子供の斬新な発想なんだろうねえ。」

まあ、ヒールの腕前は、大人でも太刀打ちできたかどうか・・・」

「はあ・・・賢者ですね」

「そうだろうか？」

「じゃあ、ハルト様のイヤリングに闇の連中が寄って来やすい・・・という問題点も、何ら問題じゃないかも知れませんか」

「え？」

「え？・・・もしかして・・・お忘れだったんですか？」

「あ・・・まずいかな？」

「・・・まずいんじゃないですかね？」

「ん・・・まあ、そうそう、奴らが居るところに出くわすこともあるまい？」

「普通に過ごしていれば問題無いかとは思いますが・・・ちゃんと考えてくださいよ？」

「はいはい」

ストーキングされた日のハルトティータ(フードの人)(後書き)

Twitter @nekomihonpo

感想、評価ありがとうございます。

ご期待に添えるような文が書けるといいな。と思いながら書いていきたいと思います。ではでは。

修正箇所

一部も 一部の(指摘感謝)
。、。

君が復活してくれたんだね 君の行いだね(指摘感謝)

嘘を吐いた日

首飾り用の鎖が欲しい。

なんて、いきなり言うのも不自然すぎる。

と、言うのも、ハルトテイータのイヤリングだ。

このイヤリング・・・結局、ネックレスにするのが無難かなあ。と
思う次第。

さてさて、どうしてこんな物を手に入れたのか説明しないとダメ・・・

・だよなあ。

仕方がない・・・ヒールが使えることをカミングアウトするか。

「父様、母様・・・お願いがあります。

首飾り用の鎖が欲しいのですが・・・」

「うん？誰かプレゼントする相手でも出来たのかな？」

「いいえ、父様。自分で使いたいのですが」

「あらあら。ウィルがネックレスをするの？」

「はい」

「ネックレス・・・では無く、それ用の鎖なんだな？」

「はい。・・・実はイヤリングを預かりまして・・・」

ポケットからハルトテイータのイヤリングを取り出ししてみせる。

「あら。綺麗・・・ペリドットかしら？」

「この宝石をあしらったイヤリングを預かった？」

「えっと・・・お礼にと言いますか・・・」

「あら。どんな良いことをしたのかしら？」

「えっと・・・ヒールが使えるようになったので」

「まあ！ウィルったら、ヒールが使えるの!？」

「ええ・・・一応・・・」

「ほう」

「ウィル！スゴいわ〜。」

さすが、ウチの息子ね。

これで、将来は安泰だわ。

末は治癒院の院長さんかしら？」

「まあまあ、落ち着きなさい。」

それで、ウィル・・・ヒールが使えることと関係があるのかね？」

「ええ・・・ハルトテイータさんという方の・・・」

「ハルトテイータ！？」

「え？父様、ご存知なのですか？」

「え、あ・・・いや・・・もしかしてエルフの方かな？」

「ええ。ご存知の方だったのですね」

「ああ・・・名前だけはな」

「へえ。有名な方だったんですね」

「それで、ハルトテイータさんがどうなさったの？」

「ああ・・・えっと・・・」

さて・・・困った。

枯れ森を癒してたら感動された。

・・・とは言えないよなあ。

「鳥・・・そう、綺麗な小鳥がケガをしてしまい、困っていらした
ので・・・」

ヒールで癒してあげたんですよ。

そしたら、いたく感謝されて・・・」

「あらあら。じゃあ、ちゃんと小鳥さんは治ったのね」

「ええ。それはもちろん」

「まあまあ。ウィルのヒールは大した物ね」

うっわ〜。なんか背中に変な汗が出てきた。

やっぱ嘘が入るときついな。

特に不自然な点は・・・ありまくりだよ！

鳥のケガでお礼にイヤリング・・・ねーよ！

「そうか・・・ハルトティータ殿からのお礼なのか・・・」

「・・・父様？」

「ああ・・・いや・・・」

そのイヤリングはハルトティータ殿が身につけていたのかな？」

「ええ・・・そうですが？」

「そうか・・・」

父様の様子がなんともヘンだな。

やっぱ、ハイエルフって凄いのか？

名前を出すべきじゃ無かったか？

・・・と後悔したが、手遅れなので子供らしく気にしないことにした。

「じゃあ、そうね・・・銀の鎖なんてどうかしら？」

「え？そんな立派な物でなくても構わないのですが」

「あらあら。ウィルが預かったのでしょ？」

「ええ。そうですね」

「じゃあ、無くさないように、しっかりした物にしておかないと」

「う・・・そうですね」

「今度、台座を作りに行きましょう」

「え？いやいや。そこまでしなくても」

「見た目もちゃんとしておかないと失礼だわ」

「そういうモノですかね・・・」

まあ・・・何はともあれ、無事に銀の鎖をゲット。

・・・高そうだな。

まあ、いいか。

ウチが貧乏ならいざ知らず、そこそこお金持ちになってるしな。

どうも、このイヤリング・・・ティータの祝福というだけあって、マジックアイテムっぽい。

知力にプラスか、魔法攻撃力、MP、MP回復速度あたりにプラス補正があるようだ。

と、言うのも・・・MP切れしにくくなった。

・・・気がする。

MPが枯渇するまでの作業が増えた。

うん。ありがたいんだけど、ありがたくない。

ってことで、枯れ森に出かける時は、持ち歩かないことにしよう。

全然スパルタになりやしない。

やっぱ、こういうマジックアイテムってあるんだなあ。

ますます、高価そうな気がしてきた。

預かっていいんだろうか？

嘘を吐いた日(後書き)

Twitter @nekomihonpo

嘘を吐いた日のウインザー（父親）

ウィルが珍しくおねだりをしてきた。

ネックレス用の鎖が欲しいという。

また、不思議なモノを要求してきたな。と知っている・・・

ハルトティータ殿からイヤリングを預かったという。

息子がヒールを使えるという事にも驚いたが、

・・・リリーも驚いていたな。リリーが教えたのではないのか？

まあ、それはそれ。

ハルトティータ殿の名前が出てくるとは思っていなかった。

「・・・では、これにて御前会議を閉会する」

ぬ？どうやら、考えに沈んでいたようだ。

御前会議が終了してしまった。

・・・ハルトティータ殿の事を報告しない訳にはいくまいな・・・
従事長の下へ向かうか。

「ラルテマ殿！」

「うん？ランカスター殿、何か用かな？」

「その・・・陛下にご報告したい儀がございまして・・・」

「ふむ？先ほどの会議では報告できないような事かな？」

「はっ。あまり大っぴらに話せる内容ではないため、内密に・・・」

「ふむ・・・とは言え、何の話かも解らなければ、ランカスター殿でも無理というモノ」

「確かに・・・そうですね・・・実は、先日のエルフに関する事
でして・・・」

「何！？そうか・・・しばし待たれよ」

ラルテマ殿が陛下の下へ向かう。
しばらくすると、別室へ案内された。
陛下の前でひざまずく。

「陛下、無礼の段、平にご容赦」「よい。話せ」
「はっ。」

先日、エルフの一族より、ハルトテータ殿がイヤリングを人族の子供に貸与した……との連絡があった件に関してですが」
「何か解ったのか」
「はっ。」

実は……その……人族の子供とは、ウチの息子のようでした……」
「何!?! どういうことか」

「息子の言葉によれば、ハルトテータ殿の小鳥を治してさしあげた所、いたく感謝され、預かったと……」

「ふうむ」
「治したとは?」

「息子は神聖魔法を使うことが出来まして、ヒールをして癒したとの事です」

「ほほう。」
「確か、まだ幼かったのでは?」

「6歳にございます」
「ほほう。」

もう、そんなになるか。

いや、しかし、その歳でヒールが使えるとは、大したものよな」
「ははあ」

「息子の言葉……と言うからには、違つと踏んでおるのだな?」
「はっ。」

さすがに……小鳥を癒してさしあげたからと言って、イヤリングを預けるか……という点が不自然かと……」

「ふむ。そうよな・・・」

「口止めされている可能性もありますので、追求はしておりませぬ」
「賢明な判断だな。」

久しく、親交の途絶えていた彼の一族との絶好の機会だ。

この好機を逸する訳にもいかん」

「ランカスター殿の息子より、譲り受ける必要はございませんか？」

「ふむ・・・いや、やめておこう。」

ハルトティータ殿の信頼の証だ。

下手なことをして、機嫌を損ねられても困る。

ランカスターよ」

「はっ」

「その預かり物、無くさぬよう気をつけい」

「はっ」

「何かあるようなら、影から、表から、手助けをいたせ。」

また、場合によっては、国を挙げて対応せねばならぬ。

報告を怠るなよ」

「ははあっ」

退出し、一息吐く。

国を挙げての対応・・・そうならない事を願う。

ウィルに何事も無いのが一番なのだ。

それこそ、国に預けてしまっても良いのだが・・・

「ランカスター殿」

「ラルテマ殿・・・何か？」

「うむ。」

さすがに、驚く内容であった。

内密な話も致し方ない事態だと思う」

「そう思っていただけか・・・」

「個人としては、国に預けていただけると、何かと安心なのだが・・・

」

「そ、それは、こちらとしても」

「だが、王がおっしゃることもごもつとも」

「確かに・・・」

「大変かとは思いますが、うまく舵取りを頼む。

必要な物があれば・・・いや、何かあれば相談して欲しい。

出来る限り力になろう」

「ありがたい。

その言葉だけで、城壁に守られている思いだ」

「では、失礼する」

「では」

さて・・・ウィルにどこまで話したのか・・・

それは家に着くまで、ゆっくり考えるとしよう。

嘘を吐いた日のウインザー（父親）（後書き）

Twitter @nekomihonpo

修正箇所

息子が申しますには 息子の言葉によれば

息子が言うには 息子の言葉

ハルトテータ殿名前 ハルトテータ殿の名前（指摘感謝）

従事長の元 従事長の下（指摘感謝）

陛下の元 陛下の下（指摘感謝）

技術革命の日（前書き）

余談編

技術革命の日

前世の記憶が、これほど役に立たないとは思わなかった。所詮、近代技術が無ければ、何の役にも立たない。

電子回路のエンジニアとして、飯を食っていたのだが、この世界では一切役に立たない。

なんせ、電気がない。

まあ、雷系の魔法があるらしいので、皆無ではないが・・・

電子回路の知識なんぞは一欠片も役に立たない。

・・・理科の実験ベースなら役に立つのだろうが。

電気系技師って電気無いと無力だな。と実感する。

身の回りの生活を改善しようにも、電気が無いことには・・・

そもそも、色々な基本が、何も解っていない。

例えば・・・味噌を使った食べ物が増えたいと思つたとする。

味噌こうじを発酵させた物だという知識はある。

じゃあ・・・味噌こうじをどうやって手に入れるんだ？

大豆を発酵させればいいのか？

それって納豆じゃね？とかとか・・・

結局、できあいの材料を使って、それなりに食べてきた程度では、この世界での食生活を改善するなど、言語道断。

無理無茶無謀ってモンですよ。

そんな訳で・・・前世の記憶が役に立つた！と思える場面は、ほとんど無い。

っていうか、思い出せない。

皆無じゃないのか？

人としての常識を教わらずに済む程度か・・・

そんな訳で、前世の記憶を使ってみよのコーナー。
ドンドンビュービューパフパフ！。

で、飲み水改善のため、ろ過装置を作ってみたいと思う。

本当は、水洗トイレを作りたいのだが、メチャクチャ難易度が高い。
つてことで、まずは簡単なろ過装置からだ。

木枠で配管を作り、網で大きなゴミを除去。

布にくるんだ川底の砂と木炭で小さなゴミを除去。

これで、綺麗な水が・・・

「ウイル・・・それなに？」

「水を綺麗にする実験ですよ」

「井戸・・・汚いの？」

「汚い・・・という訳ではありませんが、

川の水ほど綺麗じゃないですよね？」

「・・・うん。ちょっと濁ってる？」

「そこで、このろ過装置です」

「ロカソウチ？」

「上に水を流し込むと、下から綺麗な水が出てくるんです」

「・・・ほんと!？」

「出てくる・・・はずですよ」

「これから実験するんですよ」

「・・・見えていい？」

「ええ。構いませんよ」

不格好な漏斗の部分に水を流し込む。

ほづら下から綺麗な水が・・・

「・・・少しだね」

「そうですね。」

思った以上に通過してきませんね」

「でも・・・水は綺麗。」

「・・・飲んでいい？」

「ああ、ちよつと待ってください。」

一応、僕が試してからにしましょう」

「く。」

「大丈夫ですね。」

ほら。ミレイ、飲んでみていいですよ」

「・・・うん」

「く。」

「・・・おいしい」

「ちよつと、炭臭いですかね」

「でも・・・綺麗」

「脇から漏れてますね」

「そう・・・だね。漏れ漏れ・・・」

「まだまだ改良が必要ですね」

・・・前世の記憶を役立てるのは難しそうだ。

技術革命の日（後書き）

Twitter @nekomihonpo

感想、指摘、評価等々ありがとうございます。

お気に入りの件数もすっごい増えててガクブルですが、ご期待に添えるような話を書ければと思っています。がんばります。

味噌こうじではなく、大豆と米こうじから作ります。主人公の知識が間違っています。

修正箇所

前書き（お恥ずかしい・・・指摘感謝）

寝耳に水の日

その日、日課のヒールを終えて、家に帰ると、母様がすっごくイワクテ力な感じで待ち構えてた。

「た、ただいま」

「・・・ただいま」

「おかえりなさい。待ってたのよ。」

どこまで行ってたの？」

「いえ。ちよつと町の周囲を・・・小川の辺りとか」

「ああ、あの辺ね。」

「そ、それで、母様。どうしたのですか？」

「魔法特性を測定しましょう」

「はあ。測定出来るモノなんですね」

「ええ。そうよ。」

「じゃ〜ん。測定の水晶〜」

青白い水晶の中に、白い影がもやもやと蠢いてる。なるほど・・・不思議水晶だな。

「これで特性が解るのですか？」

「そうね。呪印魔法の特性と、大まかな属性まで解る優れ物よ」

「でも、お高いんでしょう？」

「あらあら。うふふ。何？その言い返し」

「え・・・いや・・・そう言わなければいけない気がしまして」

「そうね。ちよつと高いかしらね。」

「いいんですか？そんなことにお金を使って」

「いいのよ。ウィルとミレイちゃん・・・」

後々は孤児院の子供達にも使えるのだから」

「なるほど」

まあ、人材発掘用の投資と思えば高くないのか？
結局、値段教えてくれないけど。

「さあさあ、ウィル、触ってみて」

「普通に触るだけでいいんですか」

「そうよ。お手軽でしょ」

「お手軽ですね」

触るだけで解るのか！。

不思議水晶だな。

触れてみるが、特に変わった様子は無い。

ちよつと白いもやがもやもやつとしたぐらいか。

「特に変化はありませんね」

「そうみたいねえ。」

ウィルは呪印魔法の素質が無いみたい。

残念だわ」

「まあ、父様も母様も呪印魔法使えませんからね。

素質が無くて正解なのかも知れませんよ」

「そうねえ。」

「じゃあ、ミレイちゃん、触ってみて」

「・・・う、うん」

ミレイがおそろおそろ触ると、白いもやが動き出す。

ぐるぐるとねじれるように・・・白いもやが青く青くなっていく。

青白い水晶の中で、一瞬見えなくなるが、

更に濃い青になり、影となって見て取れた。

「あらあら。」

ミレイちゃん、スゴいわ。

水か・・・氷の素質があるみたい。

スゴいわ〜」

「・・・え？」

「色が属性を示しているのですか？」

「そうなのよ。」

先生をお呼びして本格的な授業を」

「や・・・まって・・・」

「あら？ミレイちゃん、授業は嫌？」

「だって・・・お金・・・勿体ない」

「あらあら。そう？」

折角の素質なのに勿体ないわ〜」

「母様、普通は家庭教師を付けるものなのですか？」

「そうねえ。」

最近だと、学院で学ばせて・・・ってことの方が多いかしら」

まあ、家庭教師なんて・・・お金持ちの所業だよなあ。

・・・世間一般からしたら、ウチはお金持ちだったな。

「じゃあ、学院でいいんじゃないでしょうか」

「そう？そうよね。」

学院なら、色々な事が学べるし。

じゃあ、ウィルと同じ学院でいいかしらね」

「ところで・・・母様、学院に行くという話は初耳なのですが」

「あらあら。そうよね。そうだったわね。」

7歳から学院に通うのよ」

「や・・・まって・・・」

「あら？何かしら？」

「・・・学院も・・・お金掛かる」

「いいのよ。気にしなくて。」

ミレイちゃんはウチの子も同然なんですから」

「・・・あう」

ミレイが困った顔で、「コチラに助けを求めているようだ。
うん。無理。」

「いいじゃないですか。一緒に通いましょう」

「ああ！？忘れてたわ」

「！？・・・何をですか？」

「全寮制なのよ・・・」

ウィルもミレイちゃんもこの家から居なくなってしまうわ」

「ああ・・・なるほど」

「それは寂しいわね。」

「・・・いいえ！でも、学院で得るモノは大きいはず！」

「そうですね。それに近いなら休みには帰ってきますよ」

「そうよね！だってすぐそこなんですもの！」

「すぐそこ・・・ってことは近いのですね」

「馬車で1日くらい・・・かしら？」

「・・・微妙な距離ですね」

「頻繁に帰ってきてくれないと寂しいわ」

「ええ・・・なるべく沢山帰るようになります。」

ところで、7歳からとの事ですが・・・

新葉の季節（3月初旬）からですか？」

「ええ、そうね」

「今・・・落葉の3巡り（12月下旬）ですから・・・

あまり時間・・・ありませんよね？」

「そうなるかしら」

いや・・・全然、時間が無いじゃないか。

何の準備もしてないぞ。
入試とかどうするんだ。

「入るのに試験とかあるんじゃないんですか？」

「あらあら。そのことなら心配ないわ。」

簡単な面接があるだけで、

あとはお金が払えるかが重要なんですもの」

「・・・金持ちの集まる学院ですか」

「そこまで高くは無いわ。」

そんなに高かったら学院が潰れちゃうもの」

「それもそうですね・・・というか、母様。」

学院に関する基本的な知識が何も無いのですが・・・」

「あら、そうね。」

ウィルたちに行ってもらうのは、

アルバ・シャンタにあるシャンタ学院よ。

アルバ・シャンタが学院都市という形になるわね」

「学院都市ですか」

「ええ。学院を中心にして、広がってる町ですからね」

「へえ。面白そうですね」

その後も母様を質問攻めにし続け、必要そうな知識を吸い上げた。

初等、中等、高等に別れており、3年、3年、5年の11年。

卒業時には17歳の成人の儀を終えてるってことだ。

っていうか・・・17歳で成人なんだな。

15歳くらいかと思ってたわ。

それはそれ。

初等、中等、高等は、カッパー、シルバー、ゴールドと呼ばれる。

卒業兼入学試験があり、その結果により、いい先生に付けるかどうかが変わってくる。

ゴールドクラスを優秀な成績で卒業した者は、要職に就くことが多いとのことだ。

まあ、ごもつともで。

いいとこのボンボンなどは、卒業試験に失敗した場合、

『成人の儀を無事に終え、戻ってまいりました』
とか言うらしい。

卒業とは言わないらしい。

すぐにバレそうなモンだが・・・

ゴールドクラスまで、一貫なのはシヤンタだけらしい。

・・・この国では。

他の”学園”都市はシルバーまでとのこと。

学園”都市”でない所はカッパーまで。

”学院”と”学園”の違いはゴールドまであるかどうか。

つまり、”学院”ってのは、大学みたいなモンか。

シヤンタは、ゴールドまでである分、学院都市として大きいのだそうだ。

入学時に希望と個人特性に合わせてコースが別れる。

戦士学科、魔法学科、一般学科の3学科。

さらに学科の中にいくつかの専門職がある。

戦士学科 剣術コース、戦士学科 弓術コース、戦士学科 隠密コース、

・・・隠密!?

どうやらシーフ系のようだが・・・他に言葉無かつたんか?

魔法学科 呪印魔法コース、魔法学科 神聖魔法コース、魔法学科

精霊魔法コース、

一般学科は単科らしい。

初等教育〜中等教育が3年×2と短いことから、早いうちから専門

職を叩き込もうという魂胆のようだ。

「所で・・・母様。」

全寮制だと、ミレイが心配なのですが・・・」

「あら。どうして?」

「いや・・・ウチは気にしていませんが、

世間的には忌み人と見られてしまいますよ」

いやいや・・・待てよ。

寮に限った話じゃないよな。

クラスでも当然いじめがあるよな・・・

「あらあら。そうね・・・どうしたものかしら?」

「・・・そう・・・だから・・・やめよう?」

「寮の方は、お願いしてウィルと一緒にして貰いましょう」

「そんなことが出来るんですか?」

「・・・あう」

「大丈夫よ。学内ではウィルが守ってあげるのよ?」

「それはもちろんです」

「・・・う」

速攻で答えたのはいいが、本当に大丈夫か?

身体のケガならヒールで癒せるが・・・

最近、やっと明るくなってきたのに、また、心に傷を負ったら、ケアできるのか?

うゝむ・・・早め早めに判断して、やばそうなら、学院から出れば
いつか。

・・・かなり、親不孝な感じがするので、あまりしたくないけど・・・

なんか、心配してたら胃のあたりが気持ち悪く・・・

「じゃあ、今日は、ミレイちゃんの学院生活の服を見に行きましょう」

「あう……お金……勿体ないの」

「じゃあ、僕は」「ウィルも一緒に行くの」

「え？」

「一緒に行くの」

「……はあ」

行く前から、ミレイと二人でため息……そんな平穏な日。

寝耳に水の日(後書き)

T w i t t e r @ n e k o m i h o n p p o

修正箇所

いいよの いいのよ(指摘感謝)

寝耳に水の日のミレイ（家事手伝い）

「た、ただいま」

「・・・ただいま」

「おかえりなさい。待ってたのよ。」

「どこまで行ってたの？」

「・・・なんか、リリー奥様・・・嬉しそう。

「・・・最近、やっと・・・リリー奥様っていうの・・・慣れたの。

「いえ。ちよつと町の周囲を・・・小川の辺りとか」

「ああ、あの辺ね。」

「そ、それで、母様。どうしたのですか？」

「魔法特性を測定しましょう」

「はあ。測定出来るモノなんですね」

「ええ。そうよ。」

「じゃ〜ん。測定の水晶〜」

「・・・スゴイ。青くて・・・白いのが動いてて・・・綺麗。

「・・・リリー奥様が嬉しそうなのは・・・コレ？」

「これで特性が解るのですか？」

「そうね。呪印魔法の特性と、大まかな属性まで解る優れ物よ」

「でも、お高いんでしょう？」

「あらあら。うふふ。何？その言い返し」

「え・・・いや・・・そう言わなければいけない気がしまして」

「そうね。ちよつと高いかしらね〜」

「いいんですか？そんなことにお金を使って」

「いいのよ。ウィルとミレイちゃん」

え？・・・ボクも？

「後々は孤児院の子供達にも使えるのだから」

「なるほど」

「さあさあ、ウィル、触ってみて」

「普通に触るだけでいいんですか」

「そうよ。お手軽でしょ」

「お手軽ですね」

「特に変化はありませんね」

「そうみたいねえ。」

ウィルは呪印魔法の素質が無いみたい。

残念だわ」

「まあ、父様も母様も呪印魔法使えませんからね。

素質が無くて正解なのかも知れませんよ」

「そうねえ。」

じゃあ、ミレイちゃん、触ってみて」

や、やっぱり・・・ボクも触るんだ。

「う、うん」

そっつと・・・そっつと・・・

ぴど。

わ・・・わ・・・なんだろ？

・・・白いのが動いてる。

・・・綺麗。

「あらあら。」

ミレイちゃん、スゴいわ。

水か・・・氷の素質があるみたい。

スゴいわ〜」

「・・・え？」

素質！？

素質って！？

ボク・・・魔法が使えるの！？

「色が属性を示しているのですか？」

「そうなのよ。」

先生をお呼びして本格的な授業を」

「や・・・まっつて・・・」

「あら？ミレイちゃん、授業は嫌？」

「だって・・・お金・・・勿体ない」

「あらあら。そう？」

折角の素質なのに勿体ないわ〜」

お金の方が・・・勿体ない。

ボク・・・メイドさん・・・だし。」

「母様、普通は家庭教師を付けるものなのですか？」

「そうねえ。」

最近だと、学院で学ばせて・・・ってことの方が多いかしら

「じゃあ、学院でいいんじゃないでしょうか」

「そう？そうよね。」

学院なら、色々な事が学べるし。

じゃあ、ウィルと同じ学院でいいかしらね」

「ところで・・・母様、学院に行くという話は初耳なのですが」

「あらあら。そうよね。そうだったわね。」

「7歳から学院に通うのよ」

「や……まっつて……」

「あら？何かしら？」

「……学院も……お金掛かる」

「いいのよ。気にしなくて。」

「ミレイちゃんはウチの子も同然なんですから」

「……あう」

「お金……勿体ないのに……」

「こうなると……だめ。」

「ウィルに止めて……貰おう。」

「……ウィル……助けて……」

「いいじゃないですか。一緒に通いましょう」

「ああっ……助けてくれない。」

「その後は……リリー奥様とウィルが……学院の話で盛り上がっ
て……」

「ボク……黙って聞いているしかなくて……」

「うう……お金勿体ないのに。」

「所で……母様。」

「全寮制だと、ミレイが心配なのですが……」

「ん！？……心配？……ボク？」

「急に……ボクの名前出てきて……何？」

「あら。どっつして？」

「いや・・・ウチは気にしていませんが、
世間的には忌み人と見られてしまいますよ」
「あらあら。そうね・・・どうしたものかしら？」
「・・・そう・・・だから・・・やめよう？」
「寮の方は、お願いしてウィルと一緒にして貰いましょう」
「そんなことが出来るんですか？」
「・・・あう」

リリー奥様・・・止まらない・・・困る。
・・・ウィルもがんばって。

「大丈夫よ。学内ではウィルが守ってあげるのよ？」
「それはもちろんです」
「・・・う」

守ってくれる・・・って・・・
う・・・うれしいけど・・・そうじゃなくて・・・
リリー奥様を止めて・・・欲しい。

「じゃあ、今日は、ミレイちゃんの学院生活の服を見に行きましょう」
う
「あう・・・お金・・・勿体ないの」
「じゃあ、僕は」「ウィルも一緒に行くの」
「え？」
「一緒に行くの」
「・・・はあ」

お金勿体ないのに・・・町の綺麗なお店に連れて行かれたの。
リリー奥様にとつかえひつかえ・・・綺麗な服着せられて・・・
色々着せられたけど・・・パーティ用ドレス・・・綺麗だけど・・・

ボク、メイドさんでお仕事だと思うの。

ウィルに・・・助けを求めても・・・

「似合ってますよ」とか・・・「かわいらしいですね」とか・・・
あう・・・そうじゃないのに・・・

「やっぱり・・・お金・・・勿体ない・・・」

「そうね。勿体ないと思う気持ちは大事だわ。」

「ただどね、お金を持っている人が使うという事も大事なのよ」
「え？」

「この服を買つと、服を作つた人にお金を払うことになるの。」

そうすると、服を作つた人が、

そのお金を使うことが出来るようになるわ」

「じゃあ・・・リリー奥様のふ」「ってことで、この服なんてどう
かしら？」

「あう・・・」

寝耳に水の日のミレイ（家事手伝い）（後書き）

Twitter @nekomihonpo

なるべく、台詞の二度読みにならないような形にしていければ・・・
と意識の方向性を変えつつ・・・まだ、出来てない段階です。

修正箇所

いいよの いいのよ（指摘感謝）

面接の日

落葉の6巡り（1月下旬）に学院の面接があるというので、ミレイと二人、馬車に揺られてアルバ・シャンタの学院都市までやってきた。

うん。実にケツが痛い。

母様が一緒に来たがったのだが、最近、体調がかんばしくない。父様は仕事があるし、ノイナは母様の世話がある。

保護者が同伴していないが、面接くらいなら、なんとかなるだろう。と、行き当たりばったりな行動をしている気がする。それにしても・・・ケツが痛い。

ミレイにはフード付きのコートを着せている。

念のために、フードをかぶって貰っている。

うん・・・髪を染めるって難しいのかな？

くそ。脱色も染色もしたことが無いから、どんな薬品使うのか解ってないぞ。

魔法で変装・・・ありそうだな。

ファンタジー小説じゃ、ありがちじゃないか。

そういう魔法、もしくは魔法アイテムが無いか探してみようか。

まあ、まずは面接だ。

つてことで、やってきましたシャンタ学院。

冬休み（？）になるのか、学院内は静かなようだ。

ドンぴしゃで面接日という訳でもなく・・・面接週間にあたるためか、面接に来た人間であふれかえるという事も無いようだ。

守衛さんに挨拶をし、面接に来たことを告げる。

親御さんはどうした？と聞かれたので、諸般の事情だと答えておく。待合室に案内された。

待合室に先客はなく、ミレイと二人だ。
まあ、その方がありがたいが・・・
部屋は十分に暖かいのでコートを脱ぐ。

「ミレイ、疲れましたか？」

「・・・うん・・・でも、大丈夫」

「面接が終わったら、

宿を探してゆっくりしましょう」

「・・・うん」

「面接・・・心配ですか？」

「・・・うん」

「まあ、大丈夫だと思いますが」

しばらくして、ドアがノックされる。

「はい」

ガチャ

ドアが開いて、エルフのお姉さんが顔を見せる。

「失礼しますね・・・ウィルくんはミレイちゃんですね」

「はい」

「・・・はい」

「簡単な面接を始めますから、

私に着いてきて下さいね」

「はい」

待合室を出て、廊下を進む。

会議室と書かれた部屋の前に来た。

「ウィルちゃんとミレイちゃんを連れてきました」
「入りたまえ」

ガチャ

12畳程度の会議室のようだ。

正面の白髪のおじいさん。

右に”がたい”の立派なおじさん。

案内をしてくれたエルフのお姉さんは左に座った。

白髪のおじいさんが口火を切る。

「さて、面接を始めようかの」

「ウィル・ランカスターくん、ミレイ・イイコナちゃんね」

「はい」

「・・・はい」

「お父さん、お母さんが一緒じゃないとのことだが、大丈夫かな？」
「？」

「はい。」

その代わり、二人で面接をしてもらえることになっているかと思
います

「ああ、そうだね」

「さて、こちらも挨拶をしておこうかの。」

ワシは、学院長のアルタヤジルじゃ」

「剣士学科のリトキバスだ」

「魔法学科のサララケートよ」

「ランカスター家、長子、ウィルです」

「・・・えつと・・・ミレイ・・・です。」

「・・・ウィルの所で・・・メイドしてます」

「まあ、そう緊張せずともよい。」

まずは・・・そうじゃの。

普段の生活でも聞かせてもらおうかの」

緊張をほぐす為か、とりとめのない会話が続く。

まあ、応対の態度とかで人となりを見ているんだろっけだな。

そんな会話のキャッチボールを続けることしばし・・・

「二人とも魔法学科ってことでいいのよね？」

「はい。」

僕が神聖魔法。

ミレイが呪印魔法になります」

「・・・うん」

「じゃあ、軽く適正を見させて貰うかの」

「呪印魔法はいいとして、

神聖魔法はどうするんですか？」

「ほう。」

呪印魔法の方法は知っているのかの？」

「ええ・・・母が水晶を持っていましたので」

「なるほど、なるほどの」

「神聖魔法、精霊魔法に関しては、水晶のように見る手段はないわ」

「無いんですか」

「無いが、特性のない者がその道に進んでも、行き詰まるだけじゃ

からの」

「自己申告なんですか？」

「そうなるかの」

「神聖魔法で入学して、呪印魔法の講義に参加するってことをしていいですか？」

「ええ、試験さえ問題無ければ、構わないけれど・・・

普通はしないわね」

「そうですね」

「さて、測定の水晶体に触ってもらおうかの」
「はい」

サララケート先生が水晶体を持ってくる。
うん。家にあるのと同じみたいだな。
何の反応もありゃしない。

「ウイルくんは、呪印魔法の特性はないのね。
・・・それでも講義を受けてみたいの？」

「ええ、知識として知っておきたいかな・・・と」
「そう？」

珍しい事を考えるのね」
「ええ、なんとなく・・・」

ミレイが水晶体に触る。
家で見たと同じようは反応が見て取れる。
ねじれるように形を変えながら、青く青く変化していく。

「ミレイちゃんは呪印魔法の素質があるみたいね」
「・・・うん」

「ウイルくんは神聖魔法が使える・・・ということでもいいのかしら」
「？」

「ええ、つたないですが、ヒールが使えます」
「すでにヒールが使えるのか。」
「それは有望だな」

はて？なんかおかしいような。

「ありがとうございます・・・」
「普通は使えない物なんですか？」

「そうじゃの。」

「使える者は、少ないのお」

「それなのに各魔法に分けてしまっんですか？」

「鶏はワシの卵を産まないというヤツじゃよ」

「ああ、なるほど・・・」

蛙の子は蛙って事ね。

「ヒールは母親から教わったのかの？」

「ええ、そうですね」

嘘ですけど。

「じゃあ、二人は志願書通りの学科ね」

「はい」

「そろそろ、面接も終わりじゃが、

何か質問はあるかの？」

ミレイのいじめの可能性について聞いておいた方がいいか？

「はい。」

「質問というか、相談事なのですが・・・」

「ほう？何かな？」

「ミレイの見た目に関してなのですが」

ミレイが膝の上でこぶしを握る。

「ミレイちゃんの見えた目？」

「ええ。」

その・・・黒髪の所為で、

忌み人と差別されていました。

学院でも差別をされる可能性があります」

「ふむ。」

教師の側は問題無いと思うが、

生徒の方はいじめの可能性があるので」

「そのような卑怯者は居ない。

と断言出来ればいいんだがな・・・

残念ながら、集団で生活していると、

どうしても優劣で出てきてしまう」

「ウィルくんが、呪印魔法の講義を受けたいと言ったことと関係があるのかしら？」

「ええ。」

とは言え、興味があるのも本当ですよ」

「そう。」

ウィルくんは騎士さんね」

ぐ・・・褒められると照れるじゃないか。

「教師の側として、目を光らせておくことは出来るが、

結局は、自分たちでどうにかするしか無いかのぉ」

「そうです・・・よね」

「まあ、でも・・・そんなに心配することもないんじゃないかしら

「？」

「え？」

何をのんきなことを・・・

「心配することがないって言ったのにも、

それなりに訳があるのよ」

「訳ですか？」

「精霊魔法使いの子が3人、入学する予定なの。」

「この子たちには、ミレイちゃんが忌み人では無いと解るはずだわ」
「え？忌み人では無い？」

「・・・え!？」

「少なくとも、現時点では忌み人では無いわね」

「なんで、そんな事が言い切れるんですか？」

「精霊と対話が出来るからよ」

「精霊には・・・そういう事が解るんですね」

「そうね。」

「精霊の目は、人の目とは違うわ」

「つまり、精霊使いが誤解を解いてくれると・・・」

「そこまでは解らないわ。」

「ウィルちゃんとミレイちゃんの実力次第って所かしら」

「そうですね」

だが、チャンスだ。

ミレイがいじめられない環境を作ることが出来るんだ。

なんとしても精霊魔法の人たちを味方にしなければ！

「現時点では・・・ってのはどういうことですか？」

「成長とともに、忌み人としての特徴が出てくる場合もあるからなの」

「なるほど・・・」

とは言え、現時点では忌み人では無いと解っただけでも大収穫だ。

「いじめに関しては目を光らせるよう、言い渡しておくからの。」

安心・・・とは言い切れんかも知れんが、

気軽に相談してくれんかの」

「はい。」

ありがとうございます。

お陰様で、だいぶ安心できました」

「今日はどうするのの？」

「えっと・・・さすがに一泊してから帰る予定です」

「学院の宿泊施設を使うとよいかの」

「良いんですか？」

ありがとうございます」

「・・・ありがとうございます」

「じゃ、今日はここまでかの。

気をつけて帰りなさい」

「はい。」

それでは失礼します」

「・・・失礼します」

面接の日(後書き)

Twitter @nekomihonpo

面接の日のサララケート（教師）

今日の面接者が控えている部屋に近づくにつれ、独特の圧迫感とでもいうか、圧倒されるといふか・・・
けど、それは決して不快ではなく、自ずとうやまいたくなる感情です。

やはり、今日の面接者がティータの祝福持ちなんでしょうね。

ノックしてから部屋に入ると、少年と少女が居ました。

話によると、男の子ってことだから、少年の方よね。

「失礼しますね・・・ウイルくんにミレイちゃんですね」

「はい」

「・・・はい」

「簡単な面接を始めますから、

私に着いてきて下さいね」

「はい」

控え室を出て、面接会場に向かう。

面接する側なのに、妙に緊張してる気がするのはいかいら？

それとも、ティータの祝福に緊張しているのかしら？

ティータの祝福持ちらしき子が、学院に来ると聞いて、是非に面接官を！とお願いしたのだけれど・・・

ウイルくんは、まじめな感じ・・・

ミレイちゃんは、おとなしくて、引つ込み思案・・・

ちよつと面白味に欠けるかしら？と思つていたら、神聖魔法使いなのに、呪印魔法の講義を受けたいなんて・・・

何を考えてるのかしら？

なんとも不思議な子。

特性を見てみたら、ウィルくんは、呪印魔法の特性は無いのね。それなのに、なんで講義を受けたいのかしら？

と思っていたら、ミレイちゃんは呪印魔法の素質持ちなのね。しかも、すごく可能性を秘めているみたい。

ミレイちゃんのためかしら？

「そろそろ、面接も終わりじゃが、

何か質問はあるかの？」

「はい。」

質問というか、相談事なのですが・・・

「ほう？何かな？」

「ミレイの見た目に関してなのですが」

相談事がミレイちゃんの見たい目？

一体、どういう事かしら？

「ミレイちゃんの見たい目？」

「ええ。」

その・・・黒髪の所為で、

忌み人と差別されていました。

学院でも差別をされる可能性があります」

ああ、なるほど・・・そうなのね。

確かに、その可能性はあるかも知れないわね。

「ふむ。」

教師の側は問題無いと思うが、

生徒の方はいじめの可能性があるので」

「そのような卑怯者は居ない。

と断言出来ればいいんだがな・・・

残念ながら、集団で生活していると、

どうしても優劣で出てきてしまう」

「ウィルくんが、呪印魔法の講義を受けたいと言ったことと関係があるのかしら？」

「ええ。

とは言え、興味があるのも本当ですよ」

「そう。

ウィルくんは騎士さんね」

顔を真っ赤にしちゃって・・・うつぶぶ、こづいとお世辞には弱いみたいね。

やっと子供らしい面を見られた気がするわ。

「教師の側として、目を光らせておくことは出来るが、

結局は、自分たちでどうにかするしか無いかのお」

「そうです・・・よね」

「まあ、でも・・・そんなに心配することもないんじゃないかしら

？」

「え？」

あら？精霊魔法使いに関する知識は持ってないのかしら？

「心配することがないって言ったのにも、

それなりに訳があるのよ」

「訳ですか？」

「精霊魔法使いの子が3人、入学する予定なの。

この子たちには、ミレイちゃんが忌み人では無いと解るはずだわ」
「え？忌み人では無い？」

「・・・え!？」

「少なくとも、現時点では忌み人では無いわね」

「なんで、そんな事が言い切れるんですか？」

「精霊と対話が出来るからよ」

「精霊には・・・そういう事が解るんですね」

「そうね。」

「精霊の目は、人の目とは違うわ」

「つまり、精霊使いが誤解を解いてくれると・・・」

「そこまでは解らないわ。」

「ウイルくんとミレイちゃんの実力次第って所かしら」

「そうですね」

「ウイルくんには、だいぶ希望の灯火になったみたいね。」

「でも・・・先ほどの顔から、ちよつと・・・悪い顔になったかしら？」

「・・・えつと・・・大丈夫よね？」

「じゃ、今日はここまでかの。」

「気をつけて帰りなさい」

「はい。」

「それでは失礼します」

「・・・失礼します」

面接を終え、部屋を出て廊下を歩く子たちに声をかけることにしました。

「ウイルくん、ちよつといいかしら？」

「はい?何でしょう」

「あなたが、ティータの祝福を授かった子なのですね?」

「え?・・・ええ、確かに預かっていますか・・・なぜ?」

「ティータの祝福からは・・・そうね・・・」

ハイエルフの高貴さが、にじみ出ているのよ」

「え？」

「エルフなら、きつと感じ取れる感覚ね」

「ええつと・・・それも不思議と言えば不思議なのですが・・・なぜティータの祝福だと？」

他の物かも知れませんか？」

「ああ・・・エルフの情報網はオオワシの翼より速いのよ」

「ええ！？」

「閉鎖した社会だから・・・かしらね。」

そういう情報が伝わるのは速いのよ。」

しかも、ハルトティータ様の話ですからね」

「はあ」

「ハルトティータ様に認められた子ですからね。」

エルフなら、きつと友好的に接してくれると思うわ。」

もつとも・・・あまり表には出てきていないけれども」

「サララケート先生には、それなりに鼻眞にしてもらえるってことでしょうか？」

「ふふ。そうね。」

困ったことがあつたら、気軽に相談してちょうだい。」

出来うる限り、力になるわ」

「ありがとうございます」

「ミレイちゃんもよろしくね」

「・・・うん」

二人を宿泊室に案内し、今度、入学してくる子たちの事を考えたら、自然を笑みが浮かんだの。

きつと、仲良く、楽しい学院生活を送ってくれるわ。」

だって、ティータの祝福を受けているんですから。」

面接の日のサニラケート（教師）（後書き）

Twitter @nekomihonpo

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0815z/>

ヒール最高

2012年1月14日00時36分発行